

御大勇それで中身を抜て見よ  
 宮居にも色氣をさつた内外也  
 たいかつと召すもゑんぎの御出陣  
 天と地を丸のみにする御船藏  
 覆面でひやくちぶさは身に餘り  
 目がさめて須彌蒼海がやつと見え  
 孝行さ我身を母にせんじさせ  
 秦のやみ壁をこはしてあかるくし  
 神風で四角な口へ戸をたてる  
 袖なりに鹽の干あがる花の頃  
 白びやうし見るも嫌ひと青びやうし  
 梅の花おほみや人はもみぢ也  
 一つ身は二つにならぬ内にぬひ  
 ぬかりなき人もふみこむ戀の道  
 平仄の中で手に葉の月をよみ  
 すてむちをうつてたんけいこし給ひ  
 なか橋といふから川もないところ  
 雪のふるしたくは空も手間がとれ  
 新しい田へは龍神水を引き  
 女房にさうだんをする深いちへ

瓦合 仲吉 庭花 亦花 斗丸 山笑 留人 志丸 古鳥 志夕 半下 里梅 葉千 雨旦 一笑 一徳 圓玉 仲吉 亦樂 渡政

尻の火であたまをかゝぬ修行をし  
 笠に着てまいる餘國の伊勢乞食  
 やねのかさ十八檀のうゑへさし  
 十八の林をこせば芝をふみ  
 大久保は葉斗りおほく鶴と云ひ  
 大名を五色にだますいゝ手づる  
 眞つころな月に霞はどでごんす  
 玉のだん一つの利劔うけてくる  
 たぬきには狐がさせぬ三會目  
 深川のやぐらもねこがいる所  
 狂言のできるこたつのやぐら下  
 中納言いへ持とよむしん大家  
 いついけにむかい酒とはきん句也  
 はらへども通ひにつもる雪の酒  
 かなくぎもできずぶつ付くどく也  
 しやうゆにも酔にも酒にもみそ一人り  
 とめておく人質つれがうけにゆき  
 ばんづけもぎつしりつまるやうに書き  
 てうせんでほつてもとれぬ耳の垢  
 耳を取るころは軍もはなにつき

山猿 柳鳥 古鳥 常住 雨夕 散売 古鳥 河楊 半下 一徳 麥仕 麥仕 ヲイタ 雨夕 市谷 三朝 龜石 柳水 山笑 柳鳥

口へんにそら音で關をとをりぬけ  
 にんべんにことばをつくすいけん也  
 かつら川口にしんじゆかけて行き  
 魚へんに交てはよせるかまぼこや  
 茶や女ちやせんにゆふはいゝあんじ  
 すみ町へ股引の客つきがよし  
 尻馬にかげべんけいは直にのり  
 土器の豆をつつく鳩のつへ  
 とるといふばんにとられるはづかしさ  
 流すのに下女は一分がしちをおき  
 おこすのに下女きなすつたかとねぼれ  
 賀のもちをついたで隠居目がくぼみ  
 川柳評  
 落葉かくおもては松をだかせられ  
 二位どのは我物顔に一本さし  
 おあしの旗は眞田かと淀の方  
 鳴たつたより酒たつた秋のくれ  
 七つ過八つ山下を四つ手かけ  
 のぞまれて嫁一本はめ二本はめ  
 身をこにし手からは敵に九さうばい

雨夕 里梅 松歌 半下 志丸 龜石 東猴 草人 留人 草人 其流 庭花 山笑 和文 同子 里梅 錦重 樂輔

すゝはきは紋目の内のちりほこり  
 ごばんをのけてしつけ芋をくつてい  
 東門に呉はめつぼうと見ぬいた眼  
 川中へおした車はかんちがひ  
 目のきいた四つ手衣の袖を引き  
 一往一來橋げたをとびあるき  
 吉隆はかごふんばつて下知をする  
 としてからさきはあいつがちへでなし  
 觀世音處を庭籠でかつて置  
 わり土間は七八人を一トたばね  
 子をくすねかち遊にするてうはんば  
 そさのをはおはらひ箱をしよいはじめ  
 紋日まへかよはぬ神にたゝりなし  
 ゑびすだといふのに下女はゑべす講  
 こんの卦は母と清明まづおぼへ  
 つがもねへだん食をする成田山  
 いなか道一里は京間より長し  
 うなぎやの女房小串をちよいとさし  
 納豆をおびひろどけの人がよび  
 しり馬にかげ辨慶はじきにのり

偽名 朝潮 水鏡 的丁 麥仕 水鏡 古鳥 笑丸 山猿 半下 カテウ 草人 葉千 松歌 水鏡 留人 笑丸 常住 春駒 東猴

帯をときなんしは皮をむく下地  
小式部が緋のはかま迄ぬすみ出し  
女房のこんだてせつびいもをいれ  
六傳のみだとなまるいおがむなり  
目黒道ちいといばいあつたとき  
早太おもへらく四條へだしたらば  
そのたつ物とくりとは是いかに  
朝がへり女房ひたいに八文字  
ごくこんい大黒まひを寺でみる  
目や口へ豫讓こくそをかはぬ斗  
鶯のけんくわを親分はさらつて来  
めくらには叶ひませぬとおふがつて  
百兩もつてかつらぎのおかみさん  
雪よりも女郎にふられ興がさめ  
はしたなくよたかに百の口をとき  
じやうのある女でかきをまかせてる  
どろ水でてつぼう玉をみかいてる  
どら和尚げいこのばちでのどをなで  
口さきののり舟にのりかごにのり  
いづもよりこたつ手ばやいゑん結び

常住 瓦合 其流 草丈 加陶 玉人 山猿 有幸 瓦合 古鳥 杜蝶 瓦合 藤波 瓦合 草人 瓦合 水鏡 水鳥 的丁 カテウ

ひるあけて見れば工合のよいふすま  
くちびるはうすくあついはつらのかは  
辻ぎみの御所へ竹光公御入り  
ぼろつかひ二歩一ぼんのふと元手  
さがみ下女よらば組んといふやうす  
ふかしたてにぎつて下女の餘念なさ  
東猿評  
圓の杖より殿中は冥加なり  
泰平の鎧は虫がうらをかき  
おそれおくもはきだめと名づけたり  
芋のぼうこん聲あつてかたちなし  
白黒の名をしのはらでさらしあげ  
玉だれをおち雨だれの下たにたち  
枕さうしを書て手でみすをまき  
雲中をおぼつかなくも射ておとし  
落角の一度もしない兜なり  
たがいせん定石をうつ甲斐越後  
金馬代小づかの馬も同じ判  
おにが鳥廻るじぶんの子は寐つき  
出しいれのならぬ土藏のついでら石

留人 山笑 草人 水鏡 笑丸 岩猿 二松 里梅 兔秃 散壳 岩猿 全亭 瓦合 カテウ 蛇内 和文 是樂 一德 柳鳥

老こんだ家はしやうじもしはだらけ  
身上は日の出むすこはふところ手  
八味丸ねりまのやうな足でけし  
權五郎さげぶりといふ目でねらひ  
かたきうちすむとさぬきへ坊さらば  
富貴天にあり鯨の初うなり  
はてい竹こゝをにぎれと生れつき  
無理むたいつんぼがあけるさうがうか  
こぼれたで水もたまらささるとも也  
切ばりの花は實になる女房なり  
手のひらへ書てのゝ字は口でいひ  
長安の御用ふらすこあつめてる  
ものもうに公家をさらつて嫁はにげ  
お目見へに琴はいゝへのうつくしさ  
満月も黒くかすみをおつぶさき  
一言鈍白樂屋はそばだらけ  
竹垣のふへは耳より身にこたへ  
代參は外にうれしい手もあはせ  
人かになれとすゝめるすみだ川  
てつぼうで士卒はしのぐ冬御陣

三朝 樂輔 河楊 三介 同鳥 水鳥 岩猿 トク 山笑 古遊 梅岨 里梅 錦重 里梅 庭花 庭谷 留人 雨旦 笑丸

すでの事酒のさかなにいなだ姫  
まだはたち山の神とはいひがたし  
あらがねの土にて出来ぬ和歌の道  
ひりかけるやうな禮義を陸尺し  
そでうちはろふかげもなし飯やく  
かんざしでしつぽく鍋のふわけする  
孝行なむすめに某むせかへり  
口べにをさすと笑に手間がとれ  
しやれたばいつくばひたいて鼠色  
劔一がしちやを出ると無刀也  
くわいりきらんしんをかたる講釋師  
つれぶしでそれはうは氣な水あさき  
すいむすこからい親父にあまい母  
一步二朱ぐらいまつたにまたうせす  
雪は鴨をにてのんでさんたんす  
下女がたこ其句ふ事九十九里  
みそはかへどもおとのせぬひとり者  
そばかすへうどんをぬつた信濃下女  
馬士のしんまい小便をどぶへたれ  
だんなさんへぎりたゝす下女いざり

三介 雨旦 草人 平喜 笑丸 志一 朝潮 草人 河楊 三松 晴風 里梅 雨柳 有幸 河楊 マイタ 河楊 錦重 笑丸

かゆづへのあとが赤子のしりへ付き

狐聲評

御舞臺へ出るは治世の七騎落  
是は善い子だぞと梅の枝をわけ  
山もりの土一升を唐でほめ  
鶴の舞ふ頃はかまくら日の出也  
南無石清水八幡と弓でつき  
かなづかひ迄も定る御家なり  
御座敷のなりにすわらぬ國家老  
名作もまげればまがる御ふがつて  
あづまへ下るしをりにはかきつばた  
ぶつ付た筆もたつしやな壽を祝ひ  
暮の嫁なんじをよぶは金の事  
拜領の二字はたからのかずに入り  
めやうがをばしらすに喰ふやつはばか  
市にうる小判延喜の御代にでき  
孝行さおやの手本をほごにせず  
小からかさ雨より霜によくうれる  
しよくを取る手だてに箸を落す也  
たごさかなはさむちへよりたべるちへ

梅笠 三松 水鏡 可笑 志夕 水鏡 山笑 水鏡 常住 笑丸 古遊 柳水 朝潮 斗丸 有幸 古遊 眼多丸 水鏡 射夕

やみうちにおはぬははくの付たちへ  
年のなだごぎぬけて出るたから船  
しらなみの行衛を古歌で御さばき  
南無御いせさまとは釋氏定木なり  
日本の夜なべに唐で目をさまし  
鴈皮紙へ書くかうがいのむしん文  
赤人の歌白いのを百へ入れ  
尺八もぼろ／＼とした古土藏  
子の糸のねだられてゐる凧の糸  
おちたるをひろはず戸をもたてすねる  
ふたおやのつへと頼むはころび也  
八艘と七尺和漢ひやをとこ  
きよみづのぶたいでいせや芝居也  
しり口でしやべつてほことたてをうり  
生國をよくぞんせすか一步とり  
らせう門がし腕づくで引あげる  
座がしらはにぎりこぶしへあごをのせ  
千人の子がのむやうな乳のゑま  
うはばみが出たと宰予はおこされる  
大尾もや／＼の關はゆるさぬ高尾なり

水鏡 同合 河楊 亦樂 古遊 青露 盤谷 岩猿 瓦合 河楊 柳水 トク 瓦合 其笠 偽名 春駒 一徳 和文 巾布

川柳評

慶安四藍より青くしたまはず  
千年もなじんだやうな御伺つけ  
くだされながら先づ引きぞ煩らはせ  
ぎふの城まづ道草にひつこぬき  
御しき日合羽の並ぶ御ほりばた  
千ざぬもよみ人はくちぬさくら也  
餘の木だと御目障りだに首尾がよし  
海上のみさご本間に射て落し  
仲途はにげ仲國はのつゝける  
こんびらへ壁訴訟して願をかけ  
二はい目はかるう／＼と最明寺  
口買でも高尾三十二相なり  
六歌仙娘一人りにむこ五人  
老子もう七夜の頃に茶をきつし  
澤庵はから／＼とした寺をもち  
講釋師すと戦場をふんだやう  
てつぼうもすいつけで出る御家から  
せきとめて見ろと一騎で乗やぶり  
三國志たんべい急はつよい人

瓦合 可笑 瓦合 和文 三枝 河楊 可笑 水鏡 盤谷 古鳥 青露 河楊 瓦合 和文 新鳥 散壳 志夕 水道

ふんべつは藥罐に成てせんじ出し  
尺八もぼろ／＼とした古土藏  
ひとり異郷で異客なり初會  
こうりやうのくいありなどゝ居候  
おいらんへいつそ諸をかたりんす  
三州の火いりだろうと大江山  
なんりやうはせうが一片程な禮  
一合を下戸三人でもちにつき  
孝經で大めし喰がからへ知れ  
二三ばい火ふたを切てどんとのみ  
井戸がへに大屋のさ／＼高あしだ  
なべいかけ四疊半ほど取ちらし  
ひちりきと赤子の聲のやかましき  
昔おとこありけりばろをかつたとき  
肉おれをのんで隠居はほねを折  
さて爪は長いが琴はからつきり  
五丁町孝と不孝のざこねなり  
さつさとござつて困るのは大晦日  
衣やうすく片そぎの箱をだき  
山歸來さてかさばつたくすり也

古鳥 盤谷 瓦合 笑丸 草人 驚舟 松歌 平喜 杜蝶 柳水 玉陶 巾布 同合 瓦合 岩猿 山笑 岩猿 笑丸 散壳 水道

しちくどく番衆おがむくなり  
下女ちぼうなべやをべておどろかせ  
すりこ木のおいこみにくいなりに成  
下女に神酒あげろといへばわたくしは  
一ばんであつ板下女がつらのかは  
衣食住ふそくもなくてぢんきよ也  
あら世帯見ればていしゆはけふも内  
雪霜にいんきよきんたま斗りおへ  
かの海底のおくに入るりんの玉  
重聚のごとくで下女のくさき事  
獣のごとく大久保にぎりたてまつり

朝潮評

東海の道をば蜘蛛が能おしへ  
名將さみかたの咽を御酔いさつ  
大丈夫米を三つにかみくたき  
えげい僧石田にくんで都づめ  
年々に木扁に登り取て出し  
水よりもさむい氷も孝にとけ  
きつとした御慶は風を盃にのせ  
人を雷でまつすぐな道をき

水鏡 偽名 可笑 散壳 三朝 玉陶 麥仕 蛇内 笠下 和文 同 笑丸 古遊 兔禿 偽名 其流 亦樂 古鳥 河楊

かねつかふ七人衆は賤が嶽  
鬼か人か鹿とわからぬかぶと也  
筋違た机で筆をとりははじめ  
筋違で机を直す御書きぞめ  
南國あんぎやとこゝろざす僧に候  
師走だと忠盛水をあびるとこ  
かんざしでさす出格子の雪の寸  
千鯛箱二度のつとめにうすげしやう  
遍照は乙女になんの用がある  
千客萬來みな來るとこまる也  
てうせんべつこの簪を呂布がやり  
雪の禪僧あたまたまからくさるなり  
ないもせぬ足で達磨は江を渡り  
母の手にあまるはどらと鬼の豆  
湯やの唄あかのぬけない聲斗り  
てうちんのひつときではるけちな窓  
遊足の嫁はま弓に射とめられ  
左りがきいたから水をのみに出る  
水くみの年禮戸じりから申し  
かんざしのうたがいはいはれる十三日

河楊 東夕 志笑 可笑 兔禿 同猴 東猴 和文 柳鳥 水鏡 庭花 鷺舟 晴風 里梅 半下 狐穴 平喜 兔禿

客とるは蜘蛛かくなは八文字  
一トしづくこぼして水をあびせられ  
やにつこい留めやうきせるかくす也  
じれつてへよと火鉢にてむけん也  
いそがしさ松から雪が首を出し  
おはぐるへぶ形り書たは女筆也  
明き手ではこたつの上のねこをなで  
足輕も棒をつゝばる御こんれい

狐聲評

御治世も扇になびく御道筋  
茶白山冬ひいたのは甘ま茶也  
人といふ文字迄上みに立ちがたし  
楠へア、の御聲で猶くちす  
甚五郎左りがきいてけづるなり  
太子講ほぞをきめたりけづゝたり  
手本にもなる子は墨にそまぬ也  
唐さらさ南部の下にへこんでる  
ふじびたひつくば鼠に下女つくり  
そばきり色をぶつかけて開帳し  
杵をかひ先餅につく年の市

山柳 目多丸 河楊 狐穴 志丸 目多丸 山柳 河楊 古鳥 亦樂 山笑 麥仕 權八 水道 梅岨 河楊 笑丸 山笑 水鏡

さむい事まわたで首をアてい  
うごかざる事山出しのおしな也  
はだか参りはちんぼうを振て行

川柳評

諸社山を一目に御覽遊され  
六朝につかへた竹は弓になり  
一トまがり十萬石の御かまへ  
せんだんの二齒にめして御ほうらつ  
六尺を七尺にしておかけぬけ  
いなか道仁者ゆづゝて田へころげ  
サア鷺についてごされと御あんない  
長刀の下タを八十二騎とをり  
篇のない文字は慶安四年なり  
へんてつもあるはたぎつた遊也  
産家からかちやへきたいなる里子  
御ゆどのであのとのさまのおふけなさ  
かくし妻ありとは主人相知らず  
京だんと鼻ごる九年いがみ合  
うつくしい顔で楊妓妃ぶたをくひ  
鈴が森目にもろくの不淨を見

山笑 杜蝶 目多丸 龜樂 水鏡 朝湖 散壳 志夕 杜蝶 三枝 水鏡 亦樂 笑丸 瓦合 瓦合 半下 笑丸 平喜 狐穴

松の内でき合の武士二人前  
のし餅のやうに生酔あつかはれ  
暮の金やはかなんじにわたすべき  
女のたましいばかげたおとことき  
杖をつく頭からけつまづきはなし  
猪牙をやめ親舟にのる大みそか  
處の内は年中どをろどろ  
材木もきめうむりやうに寄てくる  
何萬石もはいるのは江戸の升  
よくいへばわるくいわれる後家の髪  
しわい國から御はらいがたんと出る  
さり狀の硯へしたむ盆の水  
あまくさをおんばの馬が喰つくし  
おもしろくなるは三たてめ三會目  
おめでたき馬がはやめの御使者也  
こがらしに青葉のはいるたばこ入れ  
矢より後光がまぼしいと鬼神遊  
火がふると見へてかけ取あつくなり  
雲龍の湖水をわたる三日すぎ  
ありつたけお杉をなぶるはしたせに

平喜 梅笠 其流 柳鳥 笑丸 水鏡 山柳 笑丸 三枝 紀樂 朝湖 古鳥 河楊 紀樂 里梅 目多丸 巾布 水平喜 水鏡 梅笠

女房うるさくもち米はく  
かけ取のかへつた跡でふてへやつ  
論語よみろんごしらすにかりだらけ  
あたまからあびらうんけん米つき  
餅米をおこわにかけてひいてくる  
うつくしい下女御作法を度々やぶり  
口ばかりやみくもたく下手あんな  
御ふがつてながれん武者に利をくわへ  
鳥糞が無いと亡者と施主のやう  
ひやめしのたきたてをうるひなに向  
太子講ほぞをきめたりけつたり  
すはらひうばは男を尻でなげ  
おちもせぬ物を握てさむい事  
御家例だくじれくと十三日

葉千 水鏡 杜蝶 半下 水鏡 マイタ 樂輔 和文 柳鳥 山人 水道 梅笠 和文 兔禿

俳柳多留五十五篇終

俳柳多留五十六篇

前句の盛んなるや遠く信陽におよほし、こたび天白  
兩社へ奉納の催し成りぬも、正直を第一とす、撰者の  
意ならんと、東都の連衆の秀逸の冊に、かの句々をむ  
すぶと言ふ事を、其冊のかふべに神ならぬ凡夫嘗裏  
其意を恐記、

文化八秋

遊高評

有がたき神代も開かぬ水くいり  
萬代も開く大炊な御寄附也  
ぬれて干す衣が百の父と母  
二人共文屋は秋の風を詠み  
芋喰の和尚るごとくして歩行  
松竹の間から義理を述初め  
御謠が濟と唇も細字也

松歌 横好 如雀 春駒 青露 梅翠 木子

片乳は里子へひやく暮のかね  
産後十五人扶持に弟召出れ  
轉宅と聞て萬歳香つゝみ  
はせ賣の聲に戸棚をひよくら出る  
寶舟布袋の方へかしぐなり  
おきやアがれ馴染で見れば泣上戸  
まり場から衣紋流しの面白さ  
夜來風雨は素一分の頭痛也  
きつとして武家へは紺や明後日  
其内で關羽緋桃の様に酔ひ  
油屋を弟子にほしいと車胤いひ  
はかり翠有りと仲達引かへし  
風の神に送られたのは樂天  
ひへ巨燧でも雀をばぬくめ鳥  
即吟でおもふ矢坪へ又當る  
むつまじい夫婦摺鉢目が潰れ  
佛壇の下に凡夫は氣が付す  
黒砂糖道々なめて高がらせ  
村芝居じやらりぶちだとせなアいひ  
四斗樽ほどの泡のたつ鯨の尻

釣好 竹色 谷水 同裏 菅裏 雨聲 和文 里家 磯遊 同川 賤丸 釣好 散売 其久賀 横好 同住 牛住 和里 瓢金

如雀判

からうたのしろさはすみにおつけされ  
 川に禹が有て洪水させぬなり  
 切杭の噂が止むと蛙なく  
 手廻しに足を洗った張子房  
 還幸の跡へ目出たい陣をとり  
 雪氷筒切にする孝のとく  
 蒲黄の顔でなま長い夢を見る  
 七景は見て一景は聞て寐る  
 方四里は民のといまる所なり  
 萬歳は柱に節を付ていひ  
 朝歸り須彌のいかりを海なだめ  
 鬼の留主嫁洗濯の水調子  
 素一分は此雪にいざさらばなり  
 くすし忠守茶にされて腹を立て  
 伸をしいく賣て進る風の糸  
 呼出して我顔を見る二月堂  
 玉をあざむくお妾のはすは也  
 なきにしもあらず禿に仕て育て  
 狙板に乗るは目出たい佛の坐

遊 高 一 露 金 牛 和 文 同 梅 里 牛 金 牛 春 駒 横 好 遊 高 木 賀 釣 好 有 幸 青 露 雨 旦 里 遊 雨 旦 芋 洗

兄分に廊の尻をぬぐはせる  
 長持や琴を植とく氣の長さ  
 借はかりたが傘は上へあき  
 荒波もくだける石の御門番  
 嫁の禮先きの三分あとか貳朱  
 直をきめて結跏趺坐するかいみとき  
 三月月で一旬も出来ぬ蛙ども  
 十三日鼠の巢から下女が文  
 半口を讀書丸にておつぶさき  
 あした取爪で齧をつんで居る  
 富士びたい女も甘チぐらゐまで  
 御不勝手御臺所は紋づくし  
 花角力行司が臂の内びらき  
 ぬれわらといふと新造もう笑ひ  
 文日堂斧  
 わづか五守守れば廣き人の道  
 年の暮明き正面が不老門  
 曇なく九里を手に取る御寶藏  
 眞黒に成て佛も御味方  
 大鍋の松へつる程まわりみち

和 文 春 駒 金 牛 里 家 和 里 猿 子 谷 水 三 四 谷 水 有 幸 春 駒 横 好 磯 川 美 德 春 駒 横 好 谷 水 毒 水 毒 水

白波が来たて千鳥は音を發し  
 雁門をあほうくと鳥ぬけ  
 扣かねど来て賑かなたいこ櫓  
 木の下陰を宿とする福壽草  
 口をすくさせ梅がえを嫁しらべ  
 もれ出るまで花嫁はいわぬなり  
 金的と見込まれ矢文やたら来る  
 新門をぬけると古く醫者に化ケ  
 心中は大師河原で見た女  
 節分に精進落る角大師  
 瘦馬に三ヶの庄は荷が過る  
 兄様おんま尻持は妾なり  
 淺黄うらすべきやうなく夜を明かし  
 あられからばつちの見へるやす禮者  
 節季候も忌中の門ドはせきぞれす  
 追ひ羽子のそれ矢調市は盆で請け  
 美しい天魔に息子見入れられ  
 火の病迄はおもしろ盡しなり  
 はつかりの町は米にも花が咲き  
 桐の木を伐る頃娘すいが明き

里 家 和 文 其 末 有 幸 和 文 里 梅 横 好 同 好 同 好 雨 二 如 雀 雨 旦 和 文 春 駒 牛 住 女 聲 五 蝶 有 幸 里 雀

かの所コは武藏々々と一ツきり  
 文日堂判  
 菊月の晦日はきくへ鎮坐也  
 五日目に風鈴の鳴るおたやかさ  
 四里四方水も四角にしみわたり  
 夜學でも胸はあかるき夏と冬  
 松風に吹ちらされる司馬が勢  
 鶯も蛙も鳴かぬ小倉山  
 儒を穴に仕たから秦のやみになる  
 天竺へ梅から廻る日の永さ  
 南風雪の遠磨は無一物  
 人知らぬ酒もり味噌で名が残り  
 長安の酒屋李白に倒される  
 清盛は佛なぶりの元祖なり  
 なまくらな武士は青砥に合ひかねる  
 鶯の聲に臥龍も目をひらき  
 八百と呼び八文で送るなり  
 手箱を明れば琴の爪でなし  
 夜の富士屏風が浦でふし拜み  
 口切の使其手はくはぬなり

雨 夕 猿 子 和 里 猿 子 木 子 里 家 賤 丸 和 文 青 露 雨 旦 松 歌 木 子 金 牛 如 雀 木 子 青 露 金 牛 猿 子 東 鳥

鳳凰やきりんが出るゝ獲はやせ  
 惣賃は一分とお松岡づもり  
 お七がたい夜ありもので客を呼び  
 木場の釣つれぬと釣が三夕  
 牛の角文字は役者も女中向き  
 兵狼が矢さまをぬける花の朝  
 四斗樽へ矢さまを明て下戸を入  
 黒染の上りたばこでつやをつけ  
 天窓づくしで龍宮のやくはらひ  
 ひな棚の家主らしい治郎左衛門  
 先き行はせまいと亭主乳を貰ひ  
 質草は逆おもたか初なり  
 ぬるそなた亭主茶の下焚せられ  
 年に二度年季大赦に行われ  
 如雀評  
 寂山へ其日に勅使四度たち  
 かく年に夫婦別あるおだやかさ  
 萩大名を笑つてる御大名  
 非修非學切りていさかい殊勝也  
 さかんで雨おとろへて食を乞

萬仁 和文 金牛 文蝶 如雀 雨旦 横好 黄峯 金牛 雨旦 文蝶 如雀 雨旦 梁主 磯川 雨夕 金牛 青露 散売

白酒で嫁桃園に義をむすぶ  
 文金でひと目大きな門を  
 紫や水も箱から出してそめ  
 御櫛上げ芋を結び上げ隙に成り  
 長閑さや諏訪の親類遠くなり  
 なわばりをしいく鶴の評義也  
 ではござるまいと薬師寺に笑ひ  
 自隠しのひなは手の鳴る方へ賣れ  
 素見さと十軒店へ女房行  
 あまといつてもしやアくと素肌武者  
 飯もりの先きに大もりい地名  
 又雪のすかとお針かしてやり  
 けつこうな糺をしたらは源左衛門  
 落穂集腰元拾ひよみ  
 左近それお手をくと石田いひ  
 もめん荷のうしろに一ッへの字の木  
 四輪車と四ツ手と淡の軍師也  
 田樂は狐色より引かへし  
 雪中で高ひねの出た鶯菜  
 主上を初め奉りよこに這ひ

里家 雨里 和里 文蝶 里家 柳雨 雨旦 磯川 金牛 香真 柳雨 釣好 柳好 横好 里遊 金牛 青露 釣好 煙幸 金牛

汗水も溜れば白い水流れ  
 稻妻でぐわらくくと蔵を明  
 鶴ほどに小判を付る鬼子母神  
 馬鹿野郎いもりを五ツ六ツやき  
 夜講釋しびれの切る水こでん

柳雨評

無敵とは治まる御代の流義なり  
 後悔は四馬の車の跡に立ち  
 和歌の二字浦山かけて風雅也  
 物がたり迄も若菜は二葉なり  
 師の坊の七尺四方水がにげ  
 繁昌さ今はもへ出る草もなし  
 松はげに幾世も杉のへんを取り  
 是は御加筆と兼好下書を見せ  
 其板はみんな正サ目の御捌き  
 子を見る事親にしかす直な板  
 坤の卦が出たで康成腕をくみ  
 虫が知らせて頼光の寐ぐるしさ  
 花の敵立て切ておく屏風坂  
 ちり込んだ花香煎をくみなをし

雨旦 丸龍 和文 金山 和文 春駒 同露 青露 金牛 一露 賤丸 眉長 金牛 木賀 和文 遊高 金牛 辻木 眉長

大あらめさつくと着なす源左衛門  
 鉢の木が無いと粟津を貰ふ所  
 粟飯で大祿をつる源左衛門  
 下乗でも桂馬の次へ鍵を立テ  
 人ン間ンに霜がかるとしぶくなる  
 須田町で秋は木へんの市が立ち  
 和國橋あたり娘のゑもん坂  
 親は弓子は弦に寐る枕がや  
 恭仲間に打て付たる春の雨  
 花の山師匠の連るまゝ子算  
 花の山師匠扇で下知をする  
 一本宛さづけて師匠花見也  
 若衆を休ませ野郎を取替る  
 摺鉦入りの相方で米相場  
 辨當をいてふでひらく花の雨  
 長曾我部左官の先祖かたわけ  
 明キ樽と生酔下戸の荷やつかい  
 花は見せ實で身をすぎる梅やしき  
 長州は筋目正しき遊女也  
 旅おくり大和をめぐるほど遣ひ

和文 磯川 谷水 雨夕 一高 遊高 雨夕 古柳 里家 木子 竹筥 森鳥 松歌 金牛 谷水 笠下 黄峯 梁主 東鳥 和文

こわい事庭籠の口に鉄虫  
 蛇遣ひへびをつかへばいそがしき  
 茶計で盤若しること白眼でる  
 足ではたらく油揚の追落し  
 土手節の馬士はあみ笠のせて行  
 羅漢の後ろ三階のさい堂  
 村芝居さくら生どる妹脊山  
 精靈へすき切レのある膳で上ダ  
 むく鳥を鴨に仕立る松の内  
 葉しようがで下女ぬかみそへ柵をふり  
 こん地に白キ立テ葵こま廻し  
 心太ひよろ／＼とかしこまり  
 上の字の口で中の字下女覺へ  
 下女芝居極逆上の妹に見へ  
 主人ン相知らずとは下女いわせぬ子  
 三會目すつとぼつばへつ／＼ぱいり  
 横に來て舟へ狸を乗せる也  
 芋の幽霊聲有てかたちなし  
 佐久間の下女は箔付のちいれ髪

雨夕 水治 松門 香貞 杓子 其流 谷水 横好 雪雫 金牛 梅鳥 有幸 雨夕 青露 里家 里梅 礫川 散売 如雀

羽根を干す鶴は御たもんの前朱雀  
 湖と富士は日本の鼻と口  
 目出度さは産所を的に弦の音  
 結ばれる上に八月の雲が立  
 三面をすて一面に御握り  
 細々と兜をぬいで和歌の傳  
 月を春日を産むよふな廿山  
 御軍に廻り合せのいゝ高尾  
 七人一坐酒盛はうしほなり  
 暑イ事嫁のちりけの灸が見へ  
 坐禪より名の高いのは腹籠り  
 さり狀を傳法暇のよふに書き  
 最ふ押せぬ年も目出度御籠役  
 雪の竹いんぎん過て通られず  
 唐崎はほこりのたゝぬ地名也  
 残りては貞女妖婦も同じ石  
 なまぐさい風で冥途の鳥が出る  
 罷歸るが來んしたと禿言ヒ  
 鏡口もあぶなく逃るなめり川  
 こわい事庭籠の口に鉄虫

横好 柳雨 雨夕 金牛 雪雫 青露 新右 梅鳥 水治 雲路 水治 谷水 横好 柳雨 ヤマキ 可興 和里 雨旦 雨夕

膝からは少しこぼれて水調子  
 御脊中を流しましやうと長田言  
 過去帳へ利上して置御齋米  
 七色をあつめて辛い世を渡り  
 あれさおゆるし遊ばせと百合の花  
 病上り神酒へ切火も力わざ  
 黒猫のしばられて居るむごひ事  
 稗詩の細工鳥賊さま驚のよふ  
 骨と皮醫者見所がないと言  
 弟は桃の都の袴だれ  
 古井戸へ利休すんではまる所  
 むぐらもち一寸上は地ごくなり  
 留桶に膝直し程湯屋で打  
 一チ膳籠でうで卵く  
 富士の裾二十四郎が大手がら  
 死だ金生かして遣ふ化た醫者  
 猫の額におしろいが咲みだれ  
 千兩と三分が堀江町に見へ  
 いゝ天氣串差首のさらし物  
 四人が小貳朱にあたる汗をふき

雨旦 經芝 可興 竹色 横好 柳雨 雲路 里梅 釣好 和文 是樂 喜丸 由良人 香貞 木子 松雫 森鳥 雨柳 一草 東鳥

鼠木戸化して鶉の番と成  
 三國へ尻を一つ宛ひつて逃げ  
 人魂で草りをさがす樂屋番  
 むさ判を湯屋水船へ二つ浮け  
 女の身なげおどさとも言つべし  
 天然さ興屋の亭主うれい面ラ  
 奥ぬならかのと妾へ母の文  
 よしなよの上のよの字は下女置字  
 まんぢうは蕎麥に八文高くうり  
 むごい事下女三文で子をおろし  
 鐵炮であつたら鳥居押つたおし  
 大尾 横根に抜て名山につゝがなし  
 春駒評  
 光陰を矢とおもはれぬ日の永さ  
 神に飛び佛に降る梅の花  
 羽團扇で鶴の翼へ下知をする  
 草化してむかし逃たる水を呼  
 扱違ひ一里と言て徐福來る  
 源氏より奥では光る源之介  
 四三から中ぬきにする能い棧敷

如雀 金牛 有幸 半下 黄峯 森鳥 和文 梁主 芋洗 雪洗 ヤマキ 細芝 礫川 芋洗 三松 散売 和文 雨旦 里梅



扶桑應な山だと唐でそねむ也  
 立つ鳥に筆を残して一首よみ  
 不順の時候すはきに端午也  
 望まれて爪をかくして猫を出し  
 口に手があり袷元に足があり  
 大箭に我もくと雨やどり  
 いつからか川ばた駒を通す也  
 題目の様に芝海老串へさし  
 得こそはやらじ出直せと飛車をなり  
 ア、つがもねへ海老の出る木場の釣  
 つがもなく利くと三升の灸をする  
 蚊やうりはやはりひろがる聲を出し  
 薬種やの調市現金湯とよみ  
 樂屋では上席をする平衛門  
 來付けた商人ちと來ぬと死んだらう  
 長安の居酒屋葱に羊なり  
 梯の皮むいた自慢に立て見せ  
 重ては煮られるおもひ鍋の数  
 一箱は晝一はこは夜落る  
 賢人と孝子を平ラへ盛て出し

雨夕 柳好 釣好 ヤマキ 一草 里梅 夢中 里遊 柳雨 梅鳥 雨夕 紀樂 志丸 竹色 横好 和文 里松 柳雨 如雀 三松

伊勢孫のあたりへ孟母こして來る  
 彫より外は針業はしらぬ嫁  
 かくては果じと淺黄手を扣き  
 鱒うりが來べき宵だと茄子を買ひ  
 晝八つ乳夜るは密事もかたる也  
 竹光の領分らしい二合半  
 金を湯につかつたむすこ拵がぬけ  
 飛車先の歩の様に死す稻荷町  
 汐波に尿桶を出す村芝居  
 水にしてすむは濁らぬ夫婦也  
 看經の外はにしむし姑いひ  
 豆銀を崩して蓮を錢にする  
 初鰐下女雞肋をしやぶつてる  
 あゆみまで下女來は來たが土間ぐれる  
 姫糊も毛のはへる頃くさくなり  
 關断所下女よし町とおもつてる  
 中條のはれた下帶下女ねたり  
 中ゆびにしわのよるほど長いまゝ  
 女房に舌の長いはなめた下女  
 満面に笑みをふくみて下女承知

如雀 釣好 ヤマキ 雨夕 雨旦 其笠 金牛 三松 柳雨 梅鳥 里松 三松 和文 其流 其笠 青露 同露 賤丸

引こした晚よもやとは下女油断  
 下女が部屋是より左夜這道

文日堂評

今は花むかしは月の名所也  
 日々に孔子出張の繁昌さ  
 花の江戸御門に桔梗櫻也  
 咄にも五指を折らせるかきつばた  
 廣氏西施まだ櫻には咲かぬ也  
 うけに入前夜めでたき不二の山  
 花の色は美しけれど實はならず  
 品ンのよい爪を花嫁のばす也  
 掛るとも敷ともつかぬ花疊  
 かねのわらじで尋ても無い御下駄  
 名の高い月は更級晦日なり  
 誓てし人の命へ灸をする  
 もう舟もいとさし身で香で居る  
 生ぐさい荷だこ忠義の肩に出來  
 壇の浦野郎は地下の土左衛門  
 繩する不二の裾野の茄子畑  
 追風に帆は弓なりの矢橋舟

雲路 金牛 青露 若蝶 是樂 其流 雲路 雨夕 五蝶 錦重 雨旦 三松 新右 金牛 雨夕 散売 香貞 住遊 雨旦

唐さきは一入ゆかし地名なり  
 短か夜を鳴くと扣くで寐せ付す  
 江戸の不二夕べに立て朝歸り  
 惣銅壺尺取虫が六つ這ひ  
 新造は伏見海道目を配り  
 四日には古御所となる通り町  
 年禮の雪にあらは難義する  
 練馬の國の住人と名乗て出  
 御妾は足り三寸の舌をまき  
 角な玉子を三つ股でぶちくだし  
 長唄のこねどりをする杵屋也  
 坂へ押す車力當年もう九才  
 五明樓淺黄愚案に落かねる  
 もつけ調法神道者手がふるへ  
 山だして用ひられるはほとゝぎす  
 錢質を八百かりる大だはけ  
 口明けの櫛の呼吸の大拍子  
 子は夢で盗まれて居る小判形り  
 かゝさんの着物はとなりのおばさんの  
 さんたまもたらりと仲る時津風

梅鳥 志丸 有幸 眉長 和文 三松 雲路 和文 喜丸 其流 金山 賤丸 横好 雪霰 水治 柳雨 春駒 和文 辻木

おきやアがれ鐵炮玉まで廓なまり  
夜のみ笠吊と下女おもひ  
サア〜と二の膳迄も下女は据ゑ  
是で來るかと宿屋女の手を握り  
折介の遊びはたかゝ原四文  
抜たかと聞けばおへたと田舎風呂  
おう寒いので初會は先づあんど

青露評

日の下の人夢の景御手に入  
爪折を差す指折の御大祿  
松風に石も飛びちる關ヶ原  
梅干を左右に花の御容顔  
木に眠る人も競馬の放れ物  
花嫁の文あら〜と初便り  
枯るはづ干盛り後は三つ成  
出雲ほど守のあつまる惣出仕  
手習の巻は清書に念が入り  
母は子の爲に住所を三度かへ  
花の根を仲人は度々廻しに來  
寐ていた蛇の目覺させた名句也

梅鳥 笠下 遊馬 松歌 志丸 有幸 雲路 礫川 雨旦 鷓船 一夕 柳雨 横好 雨旦 同賀 木賀 酒好 礫川

くの字からもの字と糸の道しるべ  
乗り物へあやめを活て御所を下り  
生マ梅の種こつそりと嫁は捨て  
宇治の火も衛士の焚火も晝は消え  
つかまると蟬は地聲で鳴てゐる  
何を種とて面影を惜んだか  
三渡の人のほりこを付ねらひ  
日本へふじな使を始皇立て  
腰掛に寐さうな役を徐福うけ  
海士よ玉よが龍宮の合言葉  
眞黒になつて賣のは烏丸  
親の恩蜜柑籠から御免駕  
心中の縁組を見る結納屋  
三年で晴れるは長い尼あがり  
高砂にいびられ嫁は松へ逃げ  
妾の子がさすられて居るかしは餅  
瀧水を升で計るは和泉町  
有りつたけ笑て茶臼かりて來る  
ア、ら用がましう娘かけて來る  
鼎着た形りつく〜と醫者詠め

芋洗 散売 礫川 艶里 有幸 一里 木梅 横好 里家 三松 巾布 草竹 三川 礫川 水治 志丸 茂柳 里梅 里松

じやうだんにしても鼎はこはひ物  
腹がけで欄間の出來る呉服店  
一寸とひく琴へ風呂敷ひしにかけ  
和田鈴木いづれ筋有る蒲燒屋  
蛸洗ふ様に百萬へんをくる  
少將も百にはたらぬ男なり  
こりやだまれ譯はこうだと朝歸り  
船頭は朔日丸とよんで行く  
せつばつまつて娘をば眞ぶたつ  
初つ王手目の藥だと差して居る  
後ろからぐつと乗り込一の谷  
佐野の馬車に腰をかけて居る  
四會目は遣り手やつぱりこはひ面ヲ  
晝見せの上坐到遣り手咄してる  
子ばんのうおゝね利屈の有ることよ  
猩々をうたつてどぶの端を來る  
サア事だ寺は箕輪で七つ時  
其足を玉屋と御用譽て逃げ  
大雨はあばたに見へる丸の内  
紅葉ばを一ツに割れば鹿の角

里冢 眉長 一夕 松歌 辻木 鍋屋 若蝶 夢中 器水 福松 煙幸 梅鳥 賤丸 巾布 和文 同水 谷右 新右 里雀 茂柳

ち〜んぶい〜ト御袋療治なり  
持てたのも余の義にあらず夜具の事  
出て行けもすさまじいねと雪の朝  
夫レ一分花じやと淺黄相渡す  
清盛の幽霊不動かとおもひ  
化物も無筆ではなし札におぢ  
時に半べん菜を入る安す料理  
とくびこんはづして宰予いびき也  
鏡漿の張札下女の筆意也  
伊與染にわつちもしやうと下女ぬかし  
まだ出ます〜と脊中下女流し  
うんざりは花嫁いつか三井のかね  
大久保に手を洗へとは御運強  
文日堂評  
四人目は三國一の御口口也  
天草で古今めうがな手から也  
小笠原流で御朱印取り戻し  
富士島といふべき所を竹生島  
日本へ鬼の出で居る繁昌さ  
大下馬の健武藏野のつくし也

シクト ヤマキ 礫川 和里 田鼠 草竹 賤丸 如雀 螢火 志丸 里梅 雨夕 同水 煙幸 ヤマキ 巾布 和文 器水 水治

一本の松を日本の唐に植る  
 空色を鼠に染る美しさ  
 俄雨秋田で露の葉をもらひ  
 不二詣一トむれ雪の白ゆかた  
 勘定にすれば芍薬十日草  
 春秋をよむ燈火は夏と冬  
 笠より蜘蛛と讀だは吉備がよい  
 火入にもまだ有明のほとぎす  
 桑の枝提て孝子の墓参り  
 義士々々と石碑の並ぶいさぎよき  
 句の以後は瓜に獸のへん付す  
 女めもぐるだと荆柯秦舞陽  
 おつれく〜盤半盤小倉山  
 前通り下たにく〜で静舞  
 陸言はきらひざんすと高尾言ひ  
 よしの山横手を打て十八字  
 奈良の風江戸で吹せる暑い事  
 抱付て御坐る眞下へ猪牙を入  
 感應寺花をとりては身にならず  
 須磨左内殿に逢はうと坐頭來る

鮫里 器水 巾布 金牛 其聲 東丘 横好 里梅 艶里 和里 和文 青露 和文 酒好 竹色 釣好 魚冠 雪下 シクト

にが虫が寝て入りの出る涼だい  
 宇治の火も衛士の焚火も盡は消え  
 サア事だ寺は箕輪で七ツ時  
 對の人魂が田甫をふうわふわ  
 三尊にすくひ取られて眞ッばだか  
 息子連れ一寸八分先きはやみ  
 雪の段ろうそくへ降きなくさし  
 繁昌さ春の雀や目白おし  
 何に付蚊につけ嫁をいふすなり

木賀 鮫里 谷水 同中 夢鳥 一松 三夕 谷水

信州 天白兩社額面奉納

願主 里家

補助 有幸

松歌評  
 松の本神も二枝跡をたれ  
 月雪の國へ花から十七字  
 花のない春は出雲の花配  
 御熱氣が醒て所の名にのこり  
 四海浪しづかに國の賑かさ  
 切張は風よりしみる御教訓

金牛 有幸 雨聲 里遊 一盤 竹色

煎豆に花の姿で禮参り  
 宮普請中にひとりはいみとき  
 始皇をば壁と見て書を塗込る  
 勘介が嫁山鳥の尾からよみ  
 參詣群集弓からも弦からも  
 諏訪や狐が渡ったと觸步行  
 京からは華表時も越す宮居  
 人の子に翁起して貰ふ也  
 社也句也と繪馬堂の額を譽め  
 仲人へ渡して神は知らぬ顔  
 犬責に猿が下知して虎をやり  
 御妾の銀言耳に逆らはす  
 親を見る事子にしかず母へ泣き  
 掌術を指でうち合おだやかさ  
 いゝ地面まるらせ候に書とれす  
 須彌蒼海の中に寐てあまへてる  
 辻番は鼻の隙子もない所  
 戀に上下の隔有る古今集  
 蟋蟀土籠の穴へ居候  
 御紋から眞黒田よと覺えてる

時朝 里家 如雀 茂柳 横好 里松 菅裏 磯川 里雀 路人 里家 和一 辻木 林鳥 春駒 一艸 竹色 茂柳 女聲

遠州の上に駿河を掛ておき  
 降雪をいたく八瀬の白木うり  
 五月は張子六月は鏡を干  
 やせがまんかさごの中へ武者一騎  
 駒下駄を片々外に稻光り  
 ほととぎす此盃は殿方から  
 犬を見て猫は脊中で腹をたち  
 桶狭間一度に輪がおつばぢけ  
 松竹と書て紅葉の判を押  
 棒ほどに針醫の手から觸步行  
 巫女の色神かけてとは得手勝手  
 神の餅内義浄々だと晒落る  
 長局のしこし計り山はなし  
 生は堅く死後安々と後家渡  
 鈴の緒ははづし御戸帳ひんまくり  
 文日堂判

花一 可與 螢火 志丸 五蝶 可與 竹色 里遊 五蝶 和文 如雀 芳柳 竹色 釣好 其流 散壳 和里 ヤマキ

稻妻は田畑清める様に見へ  
 戸隠といへど岩戸の開がはれ  
 虹の吹く頃御社も色直し  
 新宅の魂いれる一萬度  
 智仁勇三句に出来る時鳥  
 おとふかに又五つ増す御縁日  
 腹わたの末世に残る越ッの魚  
 どよ見ても眞田は男二疋也  
 鳥の目と仙臺にては中されず  
 唐人はみんな嫌ひな蛇目すし  
 風雅さは簀の答へにいほぬ色  
 是はく顔の降る旅もどり  
 時明りでもおつ立る初のはり  
 夜宮には神馬も髪がちやんと出来  
 二世の縁三世相にて糺すなり  
 息次のみかん下部の忠義也  
 小鍛冶とは言へど大きく名を残し  
 咲た櫻になせ駒で御延引  
 生酔が来ぬと名のないさくら也  
 稻をおうりなんすかへと新造聞き

有 幸 雨 且 釣 好 雨 牛 金 遊 里 流 其 興 可 貞 香 貞 和 文 同 里 和 文 和 火 五 蝶 松 歌 美 德 雨 聲 笠 下

宮普請中にひとりはおかみとき  
 罎に吞れて御捻りはぶら下り  
 色よきと女郎の書くは金の事  
 嬉しさはかゝり次第の上ぞうり  
 異見する身も踏はずもん坂  
 雷で御待申とたいこしやれ  
 親仁はしら川息子は夜舟也  
 栗喰の娘しぶ皮むけて居る  
 還幸に蕎麥屋へ勅使三度立ち  
 江戸ッ子の弊は肩からゆり出し  
 是も他生の御縁さと息子もて  
 楊貴妃は星をお先にして契り  
 二日月西から出たる様に見え  
 嫁のいち片肌ぬいで茄子をつけ  
 梅へ行人は櫻へ行氣なり  
 橘と銀杏は金のなる木也  
 村芝居ある日狐にかはかされ  
 鳩の祭りは石橋で出た地口  
 丸洗ひ何と聞たか嫁笑ひ  
 べらぼうにもてたと茶屋へ片手見せ

里 家 是 樂 松 歌 水 治 路 人 錦 重 里 冢 散 火 和 文 千 里 松 歌 和 文 器 水 女 聲 香 水 治 夢 中 杓 子

松茸の並んだ様な田うゑ笠  
 よし町の釜はこがねの鉄でほり  
 からしなの月とは下女の聞かぢり  
 つばをつけ毛を撫まはす筆細工  
 神子の名にお稻おまんはきつい事  
 罎口に舞はせて鈴は太鼓打  
 てれつくで晩も樂む神樂堂  
 神託正さに大釜へ人だかり

川柳斧

抑唯八まん五社の鎮守也  
 神風の尊くうごく白幣  
 天白は二人と白御社  
 納まつた弓矢は鳩のふんだらけ  
 月花と分けて兩社の御祭禮  
 力雄の後は戸さぬ秋津しま  
 御神徳案山子の弓も田を守り  
 御神木武の内ほど年がより  
 取組の能さ男山稻荷山  
 參詣群集弓からも弦からも  
 楊國忠が威をくじく國家老

林 鳥 五 蝶 紀 樂 可 興 和 文 其 流 柳 雨 青 露 里 冢 香 貞 是 樂 雪 下 遊 高 磔 川 林 鳥 半 下 横 好 里 遊

扱永い日だと光陰かろんする  
 見送つて思ひは岩へねじり付き  
 錫杖と御經の間に咳一つ  
 布衣以下の娘ではなし神樂堂  
 駒犬へ笠をかぶせてがあんがん  
 治部くられ刑部かなはず關ヶ原  
 弦音を聞けば綿屋も手だれ也  
 このしろで禰宜の香でる未の日  
 大名の臍をうごかす狂言師  
 忠盛へ芋殻ともに下される  
 萬卒を捨て一妾御寵愛  
 圍れのすきやがりはちとにくし  
 曉の鐘六つ事をつきくづし  
 春の夜をすこぶる氣ばる毛唐人  
 清めの御手水ひしやくのろくろ首  
 正宗を梁へ釣つとく村ぶげん  
 有明のつれなく見ゆるうれ残り  
 五味の内親仁はにがし母甘し  
 三味せん屋くるつたけがも療治をし  
 かびくさい匂袋は母の所持

磔 川 林 鳥 可 興 青 露 釣 好 和 文 横 夕 一 蒸 和 文 芳 柳 磔 水 器 川 磔 雨 柳 川 立 里 其 流 其 久 賀 松 歌



まつくろと白くよごれて春を待  
 氣のつよいところへ外科はこしてゆき  
 あねいもとごいしのやうなはで笑ひ  
 ひめゆりの花ひあふぎの葉でかくし  
 鶯がうづらへくると一歩也  
 ていしゆのいはくたがきてもすといへ青  
 白うをでなまつをにぎるしつ  
 かつがれた下女はいき物ぐるひ也  
 ふくろくじゆ子どもの時のだきにくさ  
 けちな棟あげさげなはでけすつて  
 馬のくびかますへいれて馬士はのみ  
 いなりさへ素人らしいお名でなし  
 生園をよくぞんせすが一歩とり  
 それはマアおめでたいねとくはをかし  
 長はいたやうにあるくはふんだ也  
 おきやアがれ油さしめがうはざうり  
 曲どりはじまり三會めく  
 火がふると見へてかけ取あつくなり  
 しらみくび下女ぐにやとみの身でこすり  
 鹽にしたやうでざんすとなくさまれ

鶯舟 三松 辻木 金牛 雨柳 有幸 磯川 雪下 三木 麥仕 雨旦 其笠 斗丸 平喜 磯川 松歌 平喜 亦樂 雨柳

文日堂評

卯の花も小ざくちも出ぬ松の御代  
 御武徳は具足をぬがせ服をさせ  
 人はだを鎧のしらぬ御せいしつ  
 おだやかさ鎧は馬の脊にのらす  
 日登に駒引かへす星月夜  
 御上使も一こゑですむ御拜領  
 獻上のころはすがほのさくや姫  
 かかり火に明石の殿も御登城  
 きりばりて國家へ穴をあけさせず  
 さくや姫びは天女へおきみやげ  
 おくさまの不二を見おろすおぐしあげ  
 おち葉ほどさいせんのおふる御本坊  
 いちをばりつめて氷の下もみち  
 いこくの口もひらかせぬきんぐつは  
 唐人を繪師にかゝせるおめでたさ  
 千鳥から風風とけす別せかい  
 三井のかねなるとからさきくもる也  
 三國を一狐でばかすふじびたい  
 三と呼れてもなすびの手がら也

二松 半下 和文 留人 有幸 春駒 谷水 柳雨 金牛 和文 可笑 松歌 金牛 三松 夢中 眉長 シクト 雨旦 福松

はながみでせきとめかねし泪川  
 かつぎ着て綾や錦の中をゆき  
 さうじゆつがふじのすそのへやたらうれ  
 ことの音に夜るは名高き雨の足  
 さくや姫雲のびんづら雪のはだ  
 おにこもるさとに狐のそのおほさ  
 百二十字をやみくもによんでゆき  
 待女郎ふじの高根の雪を取り  
 ゆうれいも春迄やすむかれ柳  
 忠ぎつないたばこだと一家中  
 おとしたらひろへくと奈良の春  
 一まいをわり一命を井戸へすて  
 ぬかりなき人もふみこむこひの道  
 大あたり平ラの四五迄まつか也  
 待かねて女郎蛙へはりをさし  
 鳥かごに口をすはせるいゝ天氣  
 西行は大尾ねらいは萩でよみ  
 おあんなんせんかとふきがらを吞せ  
 そのときばいあ大おん上下わらひ  
 まん中へまたぞろあさぎ擬てかへり

散売 三松 金牛 散売 芋洗 新右 雨夕 芋洗 巢山 和文 水鏡 時住 雨旦 留人 酒好 時住 斗丸 シクト 柳糸 金牛

いゝ湯だにくひながはいり水にする  
 高ようじおはうちからしたかさごや  
 子をだしにおやがまんどを持あるき  
 三ッぼしへ片手きられたばアくる  
 ひきまどへつけてもせには廻りもの  
 にぎくでしほの目をする玉子うり  
 さくやひめへそのあたりでごろつかれ  
 土左衛門とおどぎの多いだんのうら  
 ときに判禮二米ですむけちな宿  
 すききらいむさしと相模名が高し  
 ぶゑんりよな物はくるはの油さし  
 さむさうなこへで商ふあつたかい  
 よし町はこの手柏で客を取り  
 三河迄した大きな下女がしり  
 ごんめやうな身で尻をふく手長島  
 つばかすにすればきんたま四つぼ也  
 今日やすみ小便をしてかへり  
 おつときたなとふたを取をばのかま  
 かはらけになげられてゐるへぼ隠居  
 おやばからしいと本やにぶつゝける

盤谷 住人 水鏡 盤谷 有幸 眉石 住人 梁主 手枕 三松 散売 三路 有幸 三松 福松 亦樂 賤丸 福松 梅舎

よし町はかなげのないを客へ出し  
 かごの鳥だけ天上の目をかぞへ  
 下女ねばうしのび三重でとられてる  
 村出逢ひいもの島でたこをしめ  
 ひやめしへよばひにかゝる居候  
 きしむ戸をこしを遣ておつばめる  
 富士の句が山ほどはいる下谷會  
 里梅評  
 小牧山長く久しき御手から  
 餅に迄御普代のある恐悦さ  
 富士の歌山の邊りの人がよみ  
 藤四郎薬研も弓も御用立  
 御受をも一つひねつた袴腰  
 一つ首出るうちにはなれる松の月  
 島だいは口に植木を一駄付け  
 一ト口茄子をニタ口に嫁は喰ひ  
 秋のかり春はつばめて返す也  
 面白く染出す和歌のうら摸様  
 醫書にない御脈伺ふ彦左衛門  
 勅命にあやめの顔は緋の袴

金牛 同 雨旦 里梅 和文 マイタ 紀樂 青露 同 賤丸 共流 古遊 雨旦 金牛 三松 雨旦 志九 一夕 三松

大願の娘大かた男さか  
 べつかうのてんびん棒を妾ねたり  
 大名に木陰の晝寐うらやまれ  
 菜の花のあたりに蛇の糸車  
 松島で枯た紅葉の名の高さ  
 行春の名残り堅田に足の跡  
 花嫁を琴責にする十三夜  
 初會には鳳凰高くとまる也  
 迷子札孟母は三度書直し  
 白粉の看板白く出来ぬ也  
 朝顔は合せ鏡の中で咲き  
 眞白な齒でぶつり切る三の糸  
 なるならば鳴らすにどうぞ一トしめり  
 あとの子が目好きと數萬取り圍み  
 面白く泪をこぼす三の切り  
 りんの昔花嫁ヲヤと言つておき  
 人品こつから耻しい妻が兄  
 下タを見てくらせばけつまづきが無  
 月に鳴くのは傾城とほととぎす  
 いくたびもむすぶは嫁の髪と口

雨是美青ト紀山哇古雨和亦半可松芋巢麥亦鵜  
 且樂山狸ク樂笑道遊旦文樂下笑歌洗山仕樂舟

隣から根の這て来る信夫草  
 小人島いかのとんびをたばへ入  
 引窓を寐て居てたてる手長島  
 うり物の下卑は正札付木なり  
 寐もやらす紅圍を出る淺黄うら  
 内の夜具四五十出来る程かゝり  
 身代も雪月となる雨もん日  
 けんぼうはわすれた頃に又流行  
 逢ふ事もたへて久しき座敷窄  
 鷹の爪はふらる下女が鷲つかみ  
 大黒を升かけ筋の手でぬすみ  
 とう網の様に見付は水を打ち  
 餅に春く罪とり粉にやたらされ  
 出来きらぬ内に寐て見る涼臺  
 大名の尾にこぐらかる抜参り  
 八寸登分つもつたは秋の雪  
 名月に宵から寐るは樽計  
 たて付けた薬で障子をばたすけ  
 家根舟の下女半分は目があたり  
 似面繪の論は團扇のけんくわ也

雪下 猿聲 雨夕 半下 和文 賤丸 松歌 山笑 梁主 三松 賤丸 福松 酒好 雨旦 磯川 有幸 雨旦 古遊 青露 哇道

四角でも豆腐はづんと和らかさ  
 俊寛を壹人り残して皆芝居  
 雨頭の虎に唐子は水をかけ  
 もみ尻をする下女芋のむくひ也  
 遣り栗と言ふは九月の節句前  
 糸薄キ小町の穴を通すなり  
 はみわりの様に乘てる下女が馬  
 上は這も夜這もたへぬ下女が都屋  
 たれながら下女くり返し巻返し  
 追れると尻でかぶりを家鴨ふり  
 奉公の片手間に下女孕む也  
 文日堂評  
 系ぼし着る國にまねきの様な山  
 雨風でなごりの袖を御しほり  
 生た三味線を女三は曳き給ひ  
 言つくに成と紫ほととぎす  
 松島は目へ草臥の出る所  
 筆の徳世にさへわたる湖月集  
 辛崎も今は十雨の夜の景  
 うき草の啞忽に洗はれる

哇道 三松 器水 有幸 和文 春駒 亦樂 辻木 磯川 喜丸 柳歌 雨柳 扇町 五遊 柳雨 三松 藤波

床の間の不二の煙りは獅子が吐き  
娘いやだのうて祝かぬ鞘うつし  
五月雨にぬれぬは紹巴計り也  
生た三味せんへ土佐節添て遣り  
足る事を知て九合の御山也  
隠居して元服をする根來衆  
望まれて堅田の景へ娘居り  
舞臺の下でからののおろしたの  
狼の尿かへおやくと笑ひ  
穩さ二百十日に不二がさへ  
孝靈に近江の年貢皆無也  
せんだんの二葉を察へ引込せ  
時しらぬ山はいつでも甘チ也  
能く丸められて息子は月を脊負ひ  
娘皮で洗たくをする鬼の留主  
不忍へ左りが利て呑に出る  
ぢやらんぼん濟で吉原評議也  
孔子から答て曰くばからしい  
焼餅形の頂上はおはち料  
第三はおしきせ通り遣り手留め

福松 横好 亦樂 是樂 林鳥 有幸 散売 扇町 柳雨 一夕 是樂 福松 紀樂 里松 雨柳 和文 賤丸 木柳 梅舍

月雪の飛車手王手に引かゝり  
腕押しは握り拳の二見渦  
けちな客三五の月をいきやくする  
不二の雪消て島田も解かゝり  
契情の手跡大かた信田流  
其くせに花はくれない人は武士  
不二の夢谷中へ一分遣て見る  
毛唐人聞えませぬよ加藤さん  
奈良の風諸國で暑氣を凌ぐ也  
左り前左り團扇と大違ひ  
最中の月を三日月の形りに喰ひ  
残月を平ツたくして女房焼き  
千垢離を仕廻て波へ又這入り  
ひさをゆすつて連て来てくんなんし  
十三をばつかり割は伯牙也  
面ならば作とも見える姑ばい  
おぶさつた天罽床で尻を抱き  
糸爪のがいこつかいとをおつこすり  
運飯は五ツ月立て腹がはり  
むごいやつ質屋田の字の儘で干し

雨長 眉水 器且 有且 雨幸 是樂 志丸 是樂 哇道 三松 眉長 春駒 市東 新右 如猿 古遊 眉長 是樂 金牛

獄門のひよくを閻魔臺に乗せ  
村出逢きじの卵をふみつぶし  
びり出入いびつを丸めひし隠し  
とぼさうといへば消しなと女房言ひ  
飯を焚く下女天然と杓子面  
尻が高ぶつて芋喰の和尚死に  
目薬を瘡の看板かとおもひ

青露評

御開運此時初め駿河米  
王の召迄はかゝらぬ牀で釣り  
一年に三十六度傘を干シ  
御別火の供奉は紅葉を踏分る  
御上京諸事御子息へ引渡し  
さへ渡る月を歎て集に入れ  
日本の耻は寝事がよくわかり  
外の津にないは大名小路なり  
唐がらし迄紫衣を着る結構さ  
御跡をしたふは花の兄計り  
蜀をとる手立で箸を落す也  
仲麿が相談相手月計り

和里 其笠 笠下 猿聲 酒好 金牛 器水 雨且 笑丸 猿子 横好 巾布 木賀 青狸 可道 猿笑 水鏡 有幸

陣中でおうやうに寝るふところ子  
名高さは石でくだけた物語  
志野流の競馬は奥のおつれ  
空柱で遊ぶ女ツの字を迷はせる  
顔赤穂させたが事の起り也  
知れた火の北野に燈る御神徳  
孔明もコロリンチャンではつと息  
おもいれに泣けて雲雀山へすて  
大そうに積るは雪の立姿  
駒下駄の旅は御庭と仲の町  
おりはなら筒を放さぬ御先箱  
つれづれと知らぬ顔にて文も書き  
御衣徳陸奥様と茶屋覚え  
せんざいの内へは入れぬさつま芋  
女房の水に遣ふは黒いかね  
トイキンは見附の外へ柱が餘り  
風雅さは師弟の名句雪と雨  
よし原のよし野玉屋のしつか出る  
アレサどうも桑の葉が穢れますよ  
手傳も見物も有る嫁の髪

笑丸 雨夕 木賀 同川 礪幸 有松 里水 谷治 三水 三松 雨且 和文 麥仕 雨貞 香賀 木賀 和文 三松 礪川 有幸



咳一ツせかすに道入無二の中  
主従で鶴とあやめをさし通し  
千金の其目ぐらしは花の山  
伊せの留主内義清浄にはいかす  
ぬかるみのあんころ母は併につき  
何に用の鉤か遣り人がかんらく  
谷中道にこりくと十九日  
新造を三度起して身退く  
しつとりと似顔のしめる盛狩  
名は暮路で形りは立派な一月寺  
色外に顯れ烏猫いとま  
山吹を見せて淺黄はぬれかゝり  
櫻からさくらでさめる下女が色  
小姑のきさこは嫁へ八ッあたり  
稻光り咄しをついと突きやぶり  
傾城の枕にむだな寶舟  
中元の御祝義下女は首ひねり  
策作り蜘蛛の巢からのおもひ付  
扱邪魔なものは母より女房也  
さつ急な燭臺茶碗おつぶせる

和山 三山 計九 徒水 柳雨 笑丸 和文 三松 有幸 春駒 和文 山笑 徒水 三松 徒水 茂柳 若蝶 磔川

大井川六文だけは首が見え  
時に足下の糞中と土手で聞き  
針箱のないので内がほころびる  
りん氣大變大門へちらし髪  
寺小姓間坊主をしておん出され  
遊びの奥の手切かけたら逃ろ  
折釘もぬか釘も有るうたい本  
干瓢の下で喰ひ氣のない涼み  
朝歸り戸の明く内は歩行てる  
大一座冬瓜の花と見縊られ  
秋冷が出しぬきに來て質を出し  
ひだるいにますいものなし持參金  
御祭の車の様に下女作り  
文左衛門歸ると跡は小うりなり  
はないきをあらく臥猪の跡に住み  
文日堂評

夢中 木賀 市谷 夢中 同路 柳下 木賀 水治 礫川 半下 和文 錦重 其笠 畔道 辻木 和文 巾布 雨聲

未だ富士も鹿の子まだらの御下向  
御所近く飾師も召す放生會  
御舟だにほのくと詠む奥御殿  
水の無い月に登るは雪の山  
とんぼうの眼は富士と筑波也  
目の下たに唐を見くだす和の譽  
心よさ目が明くと富士どつか行き  
三淡の王初雪へ梅の花  
色白のすてつべん也咲屋姫  
鶯の初音は聞かぬ小倉山  
年來のうらみは雪の中で解  
若白髪俄にはへるかるい事  
石塔も無腰では居ぬ四十七  
御出陣乳母はめうがの爲に死に  
和泉なる瀧を上戸はあびたがり  
花嫁の毎々に問ふ初の暮  
あて事が八十五萬石ちがひ  
生醉としらふの間を雁はぬけ  
翌芝居夜の間に嫁の富士が出來  
禿にも薄を二本ねだられる

志夕 古遊 麥仕 三松 時住 山笑 青露 時住 其流 和文 器水 一夕 留人 藤波 辻木 木賀 夢中 里梅 畔道 水治

二むかし榮花の夢は舟で覺め  
月雪の手に葉を母は直しかね  
唐崎の翠の飾りも湖が有り  
からさきのほまれ石山閣にされ  
日他のたらい禿の筒井筒  
駿河なるでもあるまいとゑりをかき  
細見へ女房こいつと焼ぎせる  
つがもなく利くはづ藥艾也  
七難を凌ぎ八九の月を脊負ひ  
書置の事なむさんと十三里  
土手の床前拙壺分出し  
澁川がむけると人をなげたがり  
縁のある紅葉に鹿も包まれる  
山家育でもお六は垢がぬけ  
籠の鳥どうしんしやうとくせる也  
肩衣をかけて百膳喰に行き  
卯の花が咲くとつんぼは身を悔み  
村師匠眼時計を飼て置  
二八と聞てあつ盛を打かねる  
うらなりの子をばころがし育也

樂志 和文 木賀 三木 金牛 横好 和文 山笑 東志 可笑 金牛 山笑 有松 有松 三幸 若蝶 笑丸 盤谷

、母親は娘のころぶところまで  
雁金を付けぬ内から蠅は飛び  
生かはり死かはり猫ひざの上  
辛さきは夜なべに雨の降る名所  
其ふした下女ぬつたとはく  
寶盛は死出のはれ着をねたり出し  
四ツ手駕五臟六腑をもんでかけ  
山迄も二夕子のかたは相摸領  
三味せんのどう桶屋かと下女は聞き  
菰かぶり元樽酒も呑んだやつ  
周易と交代をする吉田町  
五月目下女御の字の箆を取  
夜舟こぐ下女は小よりの棹をさし  
唐なすも松茸もいや下女末期  
道鏡に評義のつかぬ大やしろ  
御暇て尻金をつく寺小姓  
聞なせいおらが隣は芋出入  
わらんじを百に四ツに入れあげる  
鐘先は兜比興な軍也  
割床の地震隣てゆりかへし

和文 釣好 山笑 和文 其笠 賤丸 酒好 一夕 新右 山笑 和文 紀樂 釣好 柳雨 木子 山笑 其久賀 志夕 雨且 金枳

是樂評

染色にかのふあづまの紫宸殿  
朝霧はきえてものこる御神詠  
音にきこえたは御庭の太鼓橋  
八重ざくらけふ九重に嫁はあげ  
孝の徳櫻へのせて世にちらし  
ほのくんと誠明石で目がさめる  
行きくれずとも宿とする廓の花  
雪の舟唐までわたる筆の徳  
きりばりの花は實になる女房也  
ふられてもぬからぬ顔のきやらの下駄  
和歌の國榎のあいも歌仙也  
西陣でおるのは地下のからごろも  
指のさしてもない札を梅へたて  
もみぢがり今ははんにやが内でまち  
ふぢ川のながれかのみや地白也  
蝶々にならぬとばくがくふところ  
間のわるい役者そばやの一だんな  
きざんてやろうと煙草やはとぎすまし  
井戸ばたの櫻は秋の色に染え

和文 有幸 磯川 山笑 喜丸 山笑 志夕 古遊 葉千 有幸 青狸 賤丸 芋洗 比助 樂志 古白 柳水

朝夕はあれどひるがほ集にもれ  
功の者部家までさがす鹽の仇  
おふくびは見頃がよいと袖を引キ  
一步二朱ぐらいまつたにまだうせず  
ものいへばくちびるとよみいくらだね  
孝行さうたれし杖の脈もひき  
たきつける顔へ火の出る朝がへり  
けんぎやうと嫁と妾で二十筋  
見せさきの柱かくしは本直し  
孝はなでふかうはかぢる親のすね  
しばらくの時分に下女も赤ツつら  
ねめられぬうちに枕を嫁しまひ  
あかすりで皮をすりむく嫁のよく  
柳にけまり往來のじやまに成り  
とげぬはづ小田原町が嫁のさと  
いせのるす女房おはらひ箱をしよひ  
文七が女房お六でいりくつ  
御るす中御そゑんなどゝふてへやつ  
長つばね大工砥石に氣がおかれ  
櫻見に師匠はむめとまつをつれ

新右 綾丸 雨柳 三路 和文 水治 青露 横好 古遊 三松 横好 三松 東ノ如 錦里 キヌタ 金牛 和文 平キ 雪下

からさきはばんぢやうちんも油ひき  
神泉苑でやれかさよそれみのよ  
みづうみになるからぐつと山をあげ  
てうし迄さしきをあげるけちな晩  
べつかうのおつこちさうな中の町  
猪牙にのる息子親父の手にのらす  
初會きりこぬ氣香をうらがへし  
南ノのくめんをやつとして北へゆき  
がつかりとたいこはなをかねで捨て  
すひものゝふたで上戸はそこをいれ  
齋の子をはなし飼とははゝゆだん  
こんれいの月からといふはづかしさ  
のみの狂歌で酒もりもぐつとはね  
柳下恵しんぼうづよい名をのこし  
高士間のけんくわうづらをおどろかし  
らくがんの景を御くわしと下女思ひ  
わらだなでよべは逃てくなまこりり  
一步二百が質をおきながす也  
ほたけほどまさちらしたは紀の國や  
ア痛い徳平さんを下女はまち

晴風 金牛 梅舍 市布 其笠 綾丸 松里 器水 酒好 三松 留人 其雪 青狸 喜丸 半下 山笑 柳水 梅子

九合目の夢で手どりが九十雨  
一の富ほどついたのをくれによび  
やくそくの顔に格子の跡がつき  
くらやみを目ばかりあるくからすねこ  
さすが命のかなしきに二千疋  
むりむたひつんぼがあけるさうごうか

文日堂評

御神徳梅迄自由自在也  
其つみを身にしらぬ火の御さんねん  
とりわけて梅といふ字が御得手也  
聖賢へ櫻のかほる紫宸殿  
青天十日一ノ日は雨でのび  
勅筆のせいで寺號を御もとめ  
雨乞も島にふらせる四十八  
唐人の耳へ日本の草がはへ  
文でとび武ではるびらへちりかゝり  
一文惜しみて百姓に徳をつけ  
内心はぼさつ外面は遊女也  
忠臣はにくまれ口を三度きゝ  
凸凹は文字のいもせの不二湖水

柳雨 笑九 龜樂 杜蝶 和文 ト、ク 山笑 賤丸 横好 青露 青狸 金牛 和文 山笑 手枕 柳水 杜蝶 葉千 花町

だくばくの文ン字もわたる孝靈五  
大吉は他人すれせぬたから也  
身を筑紫てもあはんとぞ梅はとび  
三かくなものを四角な文字でほめ  
さりとてはよくかきますとそうもんし  
色よりも白いうき名が辰五郎  
まつしまでかみをとちたす旅日記  
おやゆびの外でかぞへる山でなし  
手のある忠臣は足をかみしめる  
かんおう寺諸方につけのある御寺  
二の膳は罷ならぬと國家老  
ようざんすおなぶりなんし夜具の晩  
不二まうで六合目から横へきれ  
父母まさにもいますがごとくたま祭り  
よこたてすじかひであこや申わけ  
かはかぶりでも大さうな御どうぐ  
吉日がこゝにもいとこそぐられ  
あどけなき俗語新造にくからず  
佛店うなぎ火葬のけむりたち  
みゝのないゆうれいの出る釜山海

驚舟 共笠 加丈 山笑 鶴舟 杜蝶 紀樂 里梅 松歌 庭花 和文 雨柳 天龍草 シクト 古白 青狸 巾布 横好 酒明 其雪

くみいれへあかりをとす二丁町  
さいけんをかつて夕べの名をさがし  
あたらしい橋をよぼく手をはひかれ  
これからすつとながさうと柳橋  
からさきでひけばかた田で枝をたてる  
たゞでない薬師と母に見ぬかれる  
さんざ出あるきあつためてくんなんし  
二のうでい金をほり出す紋日前  
二朱もつたなまゑい川岸へすべりこみ  
もし一寸のこゑ客の五臟へしみ  
かんにんをするが韓信かなめ也  
けいりやくの外には用の泣き男  
それだつてしかられへすにばからしい  
するが町わたの仕入も不二の山  
つれないはたうつり氣で川岸をかへ  
さじきにあるは夜の内にできた不二  
初がつをさいなんがれん生キのびる  
手長じま川をへだてつかみ合ひ  
しやくり上げく泣く肌けんくわ  
しやくはちもぼろくとした古土藏

眉長 水治 古白 器水 天龍草 三松 盤谷 加丈 水治 綾丸 藤波 和文 鸞舟 水治 シクト 可笑 水治 器水 金牛 盤谷

ぬひかけて下女すそまくの金づかへ  
神農の腹けつしたりくだつたり  
右大辨おやきたないと下女ぬかし  
寐ると又かちやふいごをおつはじめ  
さうするて一寸見に出るするが町

是樂 酒明 其流 夢中 助

俳柳多留五十七篇終

俳柳多留五十八篇

緒言

味酒の三輪にあらねば杉ばやししたつる門にもあらず、版元の花屋のしるしは柳梅の汲ども盡す、跡ひき上戸の何篇もくり返して、今五十八編の大蓋引受たる志津丸子の手際は、すつぱりえらみ出せる句々はみな一本木のまじりなし、予も飯よりは好の道、此酒の美味を感じ鼻のさきをひこつかせて斯の如し、

文化辛未

十返舎一九誌

賤丸評

衣干す御歌はさすが女帝也  
頭巾より外に鍔は入らぬ御代  
六ツの花五ツの花の御献上  
乳貰ひの親は子よりも泣あかし  
神儒佛直なる道を三筋つけ

梅舎  
酒好  
煙幸  
轉寐  
金牛

聖代の風鳥四日置に喰ひ  
こげた妻戸の評判を御ろうじろ  
孝行も忠義も和漢雪の中  
二夕股太郎だはるエと大根武者  
草も木も東へなびく關ヶ原  
古郷の山を笠に着て月を詠み  
賤ヶ嶽鬼をあざむく猿利口  
鳥糞の梢にかすむ嫁の顔  
鳥の盤迄も慈悲ある御山也  
義太夫を酒で引出す夏御陣  
玉兔には送り金鳥は迎ひに來  
かためのお持參の氣にかゝり  
品川のうみ大海のゑびす紙  
孝行は天も只見て居給はず  
抱キとめた片手が二百五十石  
三角な雪年代記にのらす  
石山で藤むらさきに咲はじめ  
土金水箱入にする繁昌さ  
降雪をいたゞく八瀬の白木賣  
今めいりイすと禿が上使に來

小  
金  
猿  
金  
其  
白  
住  
金  
莖  
住  
白  
飛  
住  
如  
住  
金  
林  
雲  
和  
同  
可  
松  
雨  
牛  
子  
牛  
岩  
駒  
遊  
牛  
遊  
遊  
鳥  
路  
里  
與  
里

ふられてる耳腹の立ツ子規  
蛾眉をひそめて言出すは金の事  
呉服屋で飯をうる日の賑かさ  
ツア事だ寺は三谷で七ツ過  
せいがんに構へてはいる路次の傘  
岡釣はさつた貌で結跏趺座  
貳分だよと禿の耳へ口をあて  
こよりの棹を新造の舟へさし  
美しさ目の降方ウへ傘をさし  
廿日程過て場すへのはつ鯉  
何其角ぐらいはなど、雨慕  
又つらまへて放し龜〜  
寶ツに路考は男かともつともさ  
行ウ水のたらひに月の皺が寄り  
いぢらしさはくろのやうな乳を捜る  
御聖代魯の昌平を江戸へかけ  
極官の夢で任官遊ばされ  
雀は四角うぐひすは梵字組  
鬼燈に禿ぶどうを貰つてく  
勘兵衛と藤兵衛御帳消しに出る

梅軒  
梅舎  
猿人  
谷水  
雨麥  
可興  
猿嘉  
飛牛  
林鳥  
一龜  
彫人  
同牛  
金牛  
野鯨  
梅軒  
酒好  
猿子  
白駒  
金牛  
彫人

下駄などでおどかしたのが御ぬかり  
江戸の富士裾野は茄子の名所也  
菊の名においらんあれば禿あり  
出立はへよくて事にどくづかれ  
座敷迄足跡のつく酔た客  
時節柄借さぬの枕言葉也  
突出しはあしかと狸見わけへす  
白太夫青竹九本初のぼり  
針よりも篋のきいてる柳原  
短兵急に押よせるもてたやつ  
鼓うち紙とつばきを尻へつけ  
衣川かげ辨慶のはじめ也  
山の宿クあたり酒手の謎をかけ  
其くせに紺屋の亭主律義者  
さゝがにの宿を見出す小ぬか雨  
人同じからず江戸ッ子金をため  
八文は見た計カ素貳朱かしへ行き  
紅葉の錦此たびはがんづかれ  
片原二郎兵衛づゝに目を配り  
田舎道問へばエトにて方ウをいひ

白駒  
猿子  
其岩  
金牛  
酒好  
白駒  
扇町  
赤下手  
住人  
新右  
林鳥  
莖火  
莖火  
螢火  
住人  
巢山  
扇町  
白駒  
飛牛  
曲撥

琉球をかぶせて踏れ棒をしよひ  
初がつは女房くらつた上へ小言  
盆で出す茶へ二三人手を伸し  
佐野の馬鞭の酔くなる程たゝき  
嫁違きおもんばかりでほろをため  
鰻屋のうちわ時々どうづかれ  
縁と時節を待兼て四火をすへ  
半ぐつは息子へんくつ親父也  
ぼた餅の下女御新造の御氣に入  
間男としらすやたらに亭主譽め  
男にせずして出て出るいたい事  
まだ文もみず突出しの手持なさ  
鳳凰は吉原鷹はよしづなり  
三升を干してわんぱく寄りつかず  
藥取のしこし山は調市作  
母親はるつちおつちと赤の飯  
空寐入のつ引ならぬ蚊に喰れ  
支度ないとは入聲の大禁句  
短くてふといのがいゝさつま芋  
焚付る格氣は顔へもえて出る

金升 猿嘉 白駒 金牛 酒好 松里 飛牛 久世成 扇町 猿嘉 白駒 飛牛 森鳥 牛木 金升 和山 梅枳 白駒 松葉 酒好

寄りねへと羅生門から腕を出し  
御三ツめも濟ンで四ツ目を御用ひ  
下女が有卦殿の御胤をやどしたり  
おゑてるに扱々長い文を書き  
氣のきいた下女はてゝある子を孕み  
女悦丸男末期の水をのみ  
女房に腹一ツぱいをあばたされ  
ごうはらさ初會あてがひ扶持を喰ひ  
お竹殿どうだと凡夫つめる也  
下女作意きうりを持ってたんのうし  
ひるたれる叱るとほえるけちながき  
午だから王子へおめへ計カいきな  
大尾

莖壳 酒好 同壳 莖子 金牛 影人 若蝶 梅枳 白人 酒好 三木 牛住 賤丸 曲撥 影人 巢山

雜司ヶ谷奉納額面  
鬼子母神

梅枳評

願主 梅枳

法の字は流れぬ筆のとめ所  
草刈笛を吹せたひ神事なり  
妙法は百日でさへちゝが出る  
御出現まします所は清き土  
神洗ふ水もあしたは星の井戸

草薙に氏子の殘す鬼あざみ  
唐人を露題目で二度退治  
鉢の子を明るとちゝにかぶり付き  
人間はわづか五十に足らぬ忠  
妙な石投てうかむは伊澤川  
其時の御馬深田のどろ月毛  
御親ン子も放れぬ文字の御神號  
動なき人のあじする御神木  
筑麻祭に出たやうな御弟子也  
ぼつたりとちるは會式の櫻也  
鎌に迄はごたへのした孝の徳  
焼石に酢とはめてたき騒ぎよふ  
そば好きと見えて藪から坊主出る  
病人も皆歸妙法願シほどき  
御利生は諸國へひゞく乳の願ん  
祖師の櫻も吉野から漉て出し  
出嫌ひといふやつ急度はがなし  
はら／＼と櫻を浴てゆひ付る  
旭をしよつて寒がるも名句也  
鬼の子／＼と母神たゝきつけ

慶金 美徳 轉寐 賤丸 三木 金牛 煙幸 林鳥 梅舍 有幸 可笑 猿子 キヌタ 雨麥 豆人 金牛 賤丸 一夕 亦樂 有幸

時に香煎なき時もさゆを出し  
堅法花おしい娘を寐かし物  
野や草を江戸へ見に出る田舎者  
牧狩の夜討の雨はいまだ降り  
神號のうちにも御子がこもる也  
茗荷屋で馬鹿を言々吞で居る  
産砂を清き土からよなげ出し  
瑠璃どのといかめしくよむ三度笠  
猿が千疋ぶらりつと御寶前  
じだらくそうな泥坊は袴だれ  
いく度言直しても下女せうしがい  
足で足かく立開の足と足  
鬼の眼に涙で和子の御行衛  
水車見て居る髪に風車  
硯石洗ひ織女は口よこれ  
うけ出すと亂筆になる八文字  
片節季程は暮せる市が立ち  
世の中の小言をきけば粟の花  
釣落す魚の咄のたいそうさ  
穴五ッ猿三疋でおつぶさき

其岩 横町 一文 和里 酒好 一橋 森鳥 賤丸 谷水 笑艸 可興 慎盟 菊主 散壳 梅里 散壳

御寺號を喰て再び筆を入れ  
 酒池肉林へ三味せんが二三挺  
 重ね着をしてにくまれる小夜衣  
 遣ると取る廻るとむしる風車  
 少しづつ五臟六腑を針いなめ  
 へんてつもないと辨慶夫ツきり  
 盗人ぞとらへて母は弊を下げ  
 鳳凰を飼はごかねのまき御也  
 眼かどの強さ會式に着た小袖だの  
 下女こりて月に一筋づゝかのみ  
 抱付てから魂が入かわり  
 御百度にねりのきや判はうつて付け  
 毛を撫て尻からはめる筆のさや  
 かゝる有難き御利生と乳母よがり  
 孕だて次男むこくにやつつける

賤丸評

天然さ清き土から御出現  
 かるからん七字は波の上へうき  
 人間の極位しつばに波がうち  
 摺鉢を豊あし原へおつぶせる

白駒 梅舍 一夕 白人 古柳 散売 松里 東平 三木 牛住 和里 伊勢遊 綾丸 嘉猿 酒好 豆人 白人 亦樂

御進獻わけて千とせは松へ来る  
 愛奴やいとんちやんとんを釋迦笑ひ  
 光陰の十段めには入りがあり  
 すめる代は濁らぬ水を升でのみ  
 雪をてらして真直な道へ行き  
 名將も勇士もしれぬおだやかさ  
 風ふくと田毎の月は鉞になり  
 名號の一字一里にあたる所こ  
 はらくと櫻を浴て結びつけ  
 佛縁で神も大いに行はれ  
 千羽舞ふ時は黄色に目が當り  
 孝行さ子にかへ母に乳をあたへ  
 水晶も及ぬ玉と水を譽め  
 裏表裾つぎそへて壹歩貳朱  
 尊とさは神なし月も太神樂  
 井の内の桶大海へ七字  
 池よりも堀より谷の有難さ  
 願ンがけのきいたは繪馬の耳だら  
 千人の末の子いまだ乳のみ也  
 敷島の道で首計カ黒くする

文橋 吹唐 若蝶 慎盟 一夕 梅杵 美徳 一火 可笑 金升 和里 金主 菊升 美徳 和里 豆人 圓丸 林鳥

六ツの内で親玉を管へいれ  
 鉄に迄齒ごたへのした孝の徳  
 松の木のせり下ケの場が嫁の出端  
 繼穂して鰐口たゝく愛らしさ  
 安藝は來にけらし紅葉の御諫言  
 十四不足でも龍神威にたえ  
 月花に嫁の手垢がたんとつき  
 雜司か谷五色の風の廻る所こ  
 伏勢の禿かよはき腕をこき  
 猿が千疋ぶらりつと御寶前  
 御親ん子も放れぬ文字の御神號  
 僧正は板の真木をよ程たき  
 天晴の勇士體よくふられてる  
 衣々の肩へもん目をたゝき込み  
 祖師は桶尊體はざくろなり  
 山吹が咲てくるわを井出の里  
 こわくかわゆくあまやかす御神號  
 紙の櫻に駒くら餅をつなぎ  
 大裏ちはせつない時の僧だのみ  
 うまい事草履を持って横にくる

美德 可笑 扇町 猿子 可興 金牛 亦樂 慎盟 金牛 森鳥 煙幸 小雨 松里 散売 和里 一夕 和里 酒好 美徳 入野

人行院を見残すと耻のやう  
 喜四郎や茂助甚助さしをわけ  
 孟宗も鯉もこふく亭でくひ  
 高みで見物を伍子背するつもり  
 遣唐使牛も少しは喰ならひ  
 愛敬に吹ながら出す風ぐるま  
 參詣はめうがに餘る有難さ  
 大名の夜鷹をかうは野居へ也  
 人の和にしかず大根とからしみそ  
 ちよつと置琴へふる敷菱にかけ  
 縮子の帯てお百度はかどらす  
 此頃は鬼とも組と禮參り  
 する人に百度參りは目で會釋  
 駕鼻に上手を遣ふ立場茶屋  
 人は桶雀はたらひふせになり  
 破風ぎわの黒雲に綱氣が付す  
 身どもを野暮とぬかいたといきどふり  
 ざくろから柚子と柿とが土産也  
 穴五ツ猿三疋でおつぶさぎ  
 金入れて百足折々しやがれ聲

手枕 美德 猿子 白駒 其岩 横町 山湖 文笑 亦樂 一夕 酒好 豆人 雨麥 梅杵 其岩 若蝶 一笑 散売 巢山

棹がごろつくと雷ほしがおち  
干した物あるとしらせる門涼み  
ラッルレロ舌が上はあごたゝく也  
かりた子をむりに泣せる倦だ頭  
それ豊歩花じやと淺黄相渡し  
今逃た魚の咄しの大そうさ  
百度めは子に投させる願ほどき  
紫を赤で表るのは江戸のみそ  
灸みせて禿の親に安堵させ  
小ゆびで結び私とあの男  
侍人の墓おかしな形りに出来  
山が見えては糸だてはもふ入らず  
俗おとし法印光る袈裟をかけ  
鬼子母神やつたら祈る子安ばい  
鉢の子をあけると乳にかちりつき  
氣のきいた手引きない眼をかけられる  
太々の料理ものせる旅日記  
玉眼を火箸で入る安い面ん  
美濃で泣子を近江からすかされる  
こんな下駄置てうせたとぶんくし

古柳 扇町 久世成 梅里 和里 梅里 有幸 亦樂 若蝶 曲撥 酒好 金牛 伊勢遊 野鯨 轉寐 東平 雨江 猿子 三木 猿子

いつ届いてもいゝかしてけふし也  
川口の脩はたりふりなしにうれ  
囊中銭んなければ先質を借き  
家をしよひ遊んであるく蝸牛  
産綱の傳受こうしてウンといへ  
聞てくりや夕べの首尾は先斯うよ  
安々と三人になるはづかしさ  
来る尻を夏中うける涼臺  
せうちする娘だんく貌を下げ  
お百度に練の脚半はうつつつけ  
下女が文よんべうるしく候と書き  
おせば明きまゐらせ候と下女がふみ  
あの後家の蟲を貴公は御存歟  
小原女と扇は牛をよくつかひ  
寶の山を挑燈でおりの也  
おともかも空へぬけてく田植の尻  
さあらば鈴を鑿口へ参らしよう  
大尾  
御戸帳をまくつて年の豆を取り  
喉句へいく代も法りの花柄榴

若右 新舍 梅夕 一子 猿子 曲撥 彫人 可笑 和里 扇町 草山 若蝶 横町 散売 可笑 酒好 賤丸

鳳凰も出よしつけき松の風  
稻の波空迄とゞく御大國  
御吉例むかでのやうな足で漕き  
御神徳天へも満る宮つくり  
東海の姫氏をさゝがにあるく也  
くも二つ和漢詩歌の道しるべ  
濱松は戸ざゝぬ御代の御吉左右  
大あづき團扇へあける川の中  
藤四郎矢よりも早く御注進  
頂戴に片袖かけて座を下り  
耳塚は和漢へひやく手がら也  
敵が粉になる筈茶臼山御陣  
かつて兜の緒をぬ桶狭間  
身を賣つて下さいましたの孝行さ  
牛の首ひつ込すのは耳の水  
みの笠の十日めに出るおだやさ  
奈良の里獵師は山をみる所  
九十三盃めはよし盛がおさめ  
其等じやないと言ふ間に堀を埋  
徳に入門の戸たゝく初登山

雨麥 金牛 綾丸 有幸 和里 雨且 蛙聲 金牛 住人 一陶 一龜 谷水 若蝶 板人 新右 吹唐 猿人 我獨 酒好 谷水

又乳か針があること片よせる  
一人の袈裟で出家が二人出来  
死に縁があつて名迄がけさ御前  
そもく遊びのらんせうは櫻也  
父母の慈悲四季にくわせる赤團子  
八艘は舟八町は忍で飛び  
堪忍の虹の出る迄雨舎り  
イヨ佛さまと入道譽給ひ  
蚊柱をくづしてみせる子ぼんのふ  
智者は過ぎ愚者は及ばぬ仲の町  
花軍では鍵梅が先きをかけ  
寒いのは餘り暑いは残る也  
母の眼へ反哺の乳をしぼり込み  
二三尺蝶々猫をつりあげる  
たばこのみせ葉吞過て迷ひ出し  
重忠の捌十三筋に聞き  
二味せんになると八文もつてかけ  
むごい事檢使に捨子笑ひかけ  
彌次郎をとらへ釘ぬきくよ  
藏前の近所にはいゝ俵町

扇町 住人 雨麥 森鳥 好成 雨且 金牛 巢山 樂志 同牛 三木 雨且 手枕 金牛 一龜 酒好 扇町 久世成 住遊

醉で候うの生菱のおめでたさ  
 むねに矢のたつは白羽のいゝ娘  
 子に乗せた四つ手に帯をへさせる  
 夕部歸りましたと母慈悲過る  
 へばせうぎ二百疋には目もかけず  
 さばくをしながら脊中をからげてる  
 金時を升で計るはこく間屋  
 精靈をちまきにくる御齋日  
 ひつこするやうにすがきひいて居る  
 書きのし計りくつて首陽山  
 さびのある所で落る豊後梅  
 二階中笑ひ禿の自びん也  
 あなどると針と山椒でつゝこまれ  
 おくたびれだらうと穴のむじなくる  
 太神樂きのふの窓のあぢをしめ  
 人魚だと思ひ龍神出しぬかれ  
 鬼燈の丸樂をうるあたご山  
 はへぬきの屏をもつてる組屋敷  
 祭りの子たのしんだ目を肩にねる  
 歸朝した船人啞はつき次第

金牛 林鳥 雨麥 梅舍 吹唐 梅舍 伊勢遊 曲撥 酒好 瓢花 雨旦 有幸 住人 梅舍 曲撥 慶金 煙幸 松葉 瓢花 金牛

石碑成就する迄に嫁居とげ  
 渡唐の天神とはおとつさんかの  
 身重もではないかと足駄叱られる  
 ゆどふふに海苔さら〜と押もんで  
 寶牀さけして上へをばみぬ息子  
 しゆる等角兵衛じゝする長い客  
 俄雨馬士が一俵あるいてく  
 子の聲でよんだで高い眞桑瓜  
 乙姫のおやちいつちく太右衛門殿  
 精靈の客にむゑんが付々に来る  
 あぐらをかいたばかりで持參金  
 呼々と突いき蛤のしんき樓  
 蜘蛛の手のやうに引つばる土用干  
 どふしたか下女うたゝねにこり〜し  
 御ん女郎の植た稻でもおつ孕み  
 土俵際むつくと起てかゝさんや  
 おつかあは毎晩泣とがんせなさ  
 三助とお三が中かのむつまじさ  
 男だと釜をかふせる祭り也  
 大尼  
 どふしたか下女摺子木を鹽みがき

金牛 三木 其岩 酒好 三木 金牛 扇町 青奴 同山 大丸 入野 如流 金牛 便諸堂 東平 彫人 金牛 住遊

五題亂撰 忠、孝、月、芝居、狂句、

金牛評

忠臣を八萬二百御所持也  
 三日月へ煙りのかゝる御吉例  
 三年はつくらぬ孝の道普請  
 何なしと小町は歌のうつわもの  
 霜に花咲せて貌をみせる所  
 裂と着る衣和漢の忠義也  
 稻妻と雪はあかるき孝の道  
 筋くまの唐迄届く江戸の花  
 御白洲へ親子めさるゝ有難さ  
 三階菱は花菱のあらしなり  
 月をまねかば清盛ははれ病ひ  
 三か所で工藤をねらふ日の永さ  
 孝の道からは五常の道へ出る  
 田毎程月を並べる歌がるた  
 古來稀なるおどり子は七十餘  
 ゆび折るは役者も江戸のかきつばた  
 夜るわたる祭はあじな猿田彦  
 孝心も氷もあつくはり詰る

雨夕 賤丸 元祿 松里 吹唐 畔道 曲撥 磯川 同舍 梅松 里松 杓子 留人 和文 有幸 可笑 里梅

子を捨て母へ反甫の乳をあたへ  
 袋にも入らぬは月の弓計り  
 櫻木を削るは八重な忠義也  
 船唄も芝居も猿がはじめ也  
 江戸でする本望京の字は入らず  
 狂言に實が入藝に花が咲き  
 うたがゐるを月にかけたる名句也  
 大入と酒呑童子へ書て出し  
 床の海ふとんの島へ大つなみ  
 雷のはれて墓所へいとま乞  
 昨日の夜郭巨初めて安心し  
 信女の月を流させるどら和尚  
 大山伏を夢に見て弓削めされ  
 年號の名酒に残る孝の道  
 三笠山檢唐にして月の歌  
 其なえのおほいなる語を下女笑ひ  
 切落つゝい眞様と下女がいひ  
 下女が忠臣此世はじまつて初つ  
 棧敷から黒つる首を下女伸し  
 赤穂鹽四斗七升にせんじつめ

手枕 笠下 志丸 一龜 散売 志丸 雨夕 磯川 志丸 牛住 登火 釣好 賤丸 雨夕 青露 盤谷 夫善 有善 樂我 錦重



惚ぬ筥山椒の魚を焼てかけ  
二千里も行程きばる月の鰭  
孝行さ嫁杖になり笠になり  
さえぬ返事がきいたと月の文  
對面の三方日々にあらた也  
大きいも白いも石は忠義也  
旅役者すのこ舞臺も踏だ奴  
亡君へ西瓜を一つ冬そなえ  
地團子をくふのは息子嫌ひ也  
後の月上戸の藤の藤が見え  
下女が忠節けし炭を二俵ため  
兜首後家夜つびてへ泣あかし  
わるい所へお國からよふ御出  
畜生道をうかみ出てやるなエへ  
二三人來るととふくたらし也  
寐るが惜いと小夜更てぐわあらく  
謎々かけよがとかんすか月の事  
目を四つよせて泣出すい、藥  
申子の願んしておがみく  
鰯で鯛男めかけの忠義也

半下 木九 志旦 雨旦 和有 錦重 其流 笠下 巢山 扇町 其久賀 梅枳 錦重 磯川 森鳥 賤丸 古遊 亦樂 一夕

大冠 逆鋒の先きへ日本の寄る如し  
賤丸評 日の御座も守護なす月の名所也  
孝行さ天鳥獸にたがやさせ  
名月に與は雲井の調べ也  
橋の香をなつかしみ孝へ入れ  
月影の調子くるわぬ琵琶の海  
高島の海で湖月の草紙出來  
御書院へ御下駄を廻す三日の月  
忠臣さ達磨へさせる緋の衣  
汝なくばと次信がまくらもと  
地名にも武さしの芝に露の月  
翌す芝居與は明石の浦に寐る  
ゆび折りは役者も江戸の杜若  
忠々と淺岡しとふ雀の子  
黒髪を孝婦おんまくじつて置き  
竹村は五町芳村二町まち  
どつ鯉と王祥起あがり  
是で茶を煎て上げますと郭巨言ひ

散売 志九 留人 坂下 雨旦 柳雨 青露 半下 笠下 和文 梅舍 雨旦 青露 有幸 雨麥 金牛 木賀 扇町 金牛

月でなくのは籠の鳥時の鳥  
迦陵頻月宮殿へむすこ揚げ  
九合にて十分んにうつ孝の徳  
妾う芝居十五六篇摺て行き  
人情にかけても月は名所也  
漆屋で見たが豫讓がほんの顔  
村雲はかつら男にかたきやく  
かつたりといふと千兩箱がふり  
役者の發句箱せこへ仕廻ふ也  
海老を誰だとはタ、、たわけもの  
孝行な息子は五人並をもち  
將基の駒はやつべしにかゝる忠  
がくやの風呂へ籠頼公の御入り  
だき柏きやつ幽霊のかしらぶん  
どの鳥もトヒョくと計り啼き  
切落し人の所領も押領し  
辨當兩役酒のさかなにすし  
ふけへきな月見兔の論ではて  
たな引雲の絶間より月はばあ  
忠の字は元祿の頭言はじめ

可笑 木賀 ヤマキ 金牛 雨旦 亦樂 樂我 巢山 金牛 同下 笠下 金牛 同里 松竹 保文 和夕 巢山 金牛 柳下

きつかけを空に知つて、雪がふり  
はねまへに一寸來てみる茶屋の下女  
親に生うだと羅漢から譽る也  
大笑ひ三番叟から淺黄ほめ  
春べりは十六夜からと兎いひ  
天のなす所隣りの棧敷へ美  
しつたふりせなあ市川菊之丞  
畜生道をうかみ出てやるなエへ  
わたりましたと百且那追出され  
悪方を取殺さんと下女思ひ  
か様あそばせと鶴鶴びくつかせ  
夜角力の關稻荷山床の海  
雪隠でエヘンといふと月を譽め  
ぬれの慕嫁は頭べをたれて居る  
大味ぢを承知で和田は拜領し  
かき廻す程がいよと茶せん髪  
勅諭だ坊主すぬけを罷出せ  
余のてれつくは派のきかぬ御宇とかや  
男木ではへば女は水でまち  
毛をばくりくと女郎ひんむしり

金牛 半下 雨旦 小雨 金牛 木賀 錦重 梅枳 巢山 金牛 里梅 如猿 酒好 ト、ク 菊主 美徳 手枕 美徳

助兵衛と九次郎相摸極こん意  
かくあらんとは思ひしが女悦丸  
大珍事ぬれの幕にて下女氣絶  
大尾 月のはりにならぬ姫小松

文日堂評

手がらさは反古にして來る御墨付  
秋の夜の足らぬは月の譽れ也  
西の丸へ百萬石の家中が來  
月の鏡で化粧する咲屋姫  
れんじから月はさゝせぬ渡邊家  
琴三弦で十六宵の賑かさ  
善盡し美盡し五軒續き也  
孝行さ柄杓のたゝぬ飯を焚  
更科の月に打こむ小夜祐  
淺野にも深き根入りの要石  
白糸に月をからんで落る瀧  
一富士に高き譽れは曾我の孝  
蚊屋を釣度に孝子を思ひ出し  
霜に花咲せて顔をみせる所こ  
白壁で太夫を五軒塗ふさぎ

一龜 金牛 酒好 猿子 金牛 巢山 山撥 紀樂 金牛 青露 志丸 野鯨 樂志 梁主 柳雨 留人 松里 手枕

いろはがな名も高輪に残る石  
入りの有うちは敵を討もらし  
名月に息子孫吳が術もつき  
うづらではなくつて目白棧敷也  
爪のたつ所があるで跡を出し  
月かさに知識の出來る花の宵  
から麥で一暮みせる旅芝居  
柏子木に嫁はむすびの口をふき  
中秋はだんご十五の月見也  
譽ことは頼朝公に手をつかせ  
見せは星座敷は月の騒ぎ也  
始終どんちやんは素人芝居也  
鹽から聲で赤穂記を講じてる  
草財布關と月夜を二度あるき  
荷はかるく忠義は重きたばこ賣  
抹香も國府も匂ふ品の月  
もろ肌をぬくが忠義の極意也  
田毎より手毎の月を息子背負  
眞黒なしら波井戸の中から出  
よわい武士月を切かけられて逃

豆人 畔道 梅舍 金牛 同文 和文 金牛 畔道 辻木 金牛 有幸 板人 同牛 柳雨 和文 留人 雨旦 市東 賤丸

こいつ妙だと思つたら月を喰ひ  
月二つしよつて息子は立ちきれず  
忠と見せ不忠とないた大鼠  
岡に住かつばの多い二町まち  
はじまると又いき升と堺町  
跡足はわさびおろしに出世也  
唐人の月見に冢の直が上り  
安芝居竹のかわから虎を出し  
むくれたりはちけたりする十三夜  
ぬれの幕下女べらぼうに仲上り  
月の座へ親に抱れて出る子芋  
氏なくて道鏡玉の腰をする  
たま莖を娘にきかれ母こまり  
舟を漕よふに茶臼を下女は挽き  
這入つてもよしかに腰をつかひ止め  
御不勝手腰も大きくつかわれず  
五十文二番原とはいへ出所こ  
くりからの松茸をくふ廣い奴つ  
ろくる首どくろを巻て口をすひ  
大山伏を夢に見て弓削召され

賤丸 酒好 雨柳 桃和 如猿 金牛 元祿 雨旦 其笠 酒好 水治 牛住 紀樂 若蝶 春駒 金牛 其流 谷水 同水 賤丸

大尾 賤丸評 實語教孝靈五より前の作く  
不二の夢御神酒も三國山を上げ  
長柄のないが笑止さに松茂り  
粗板に紫の乗るいゝ日和  
盛久と靜の跡で千羽舞ひ  
八拾貳斤茶にしても引つたゝす  
澤邊のあやめ引に出る雲の上  
嵐にも名高き花の名所也  
扱長い和田一族の系圖也  
鳥賊化して驚となる比時鳥  
年の市すこぶる百鬼夜行也  
繼母そだち夜中う啼子規  
忠度は其夜小櫻おとし也  
こいつふるとみたら手を付べからず  
唐崎は合羽にみへのいらぬ土地  
四郎兵衛が關へも千鳥通ふ也  
砥石またげは關守の名智也  
鬼の中猿も一疋淺草寺

雨夕 金牛 樂我 金牛 彫人 一夕 白人 一龜 桃和 和田 金牛 同牛 雨旦 里梅 梅耕 柳下 板人 三木

うちぞ床しき裾脇の美しさ  
 木枯の落葉に蟹も穴まどる  
 わすれても乳が餘るので思ひ出し  
 せんたくに鬼は留守かと綱は聞  
 大黒柱しよつて居る白鼠  
 眞つ裸でもおきせんのなれの果  
 仲人は小田原町に鐵炮洲  
 唯頼めとは欲氣なき觀世音  
 暖簾迄秋を染たるあか蔦屋  
 若世になつて御妾は本意也  
 麻の葉を手桶に染る薄氷  
 きみくたるを玉子屋はよつて居る  
 糊のきく過たやうなは母の雛  
 床花を些少なからと淺黄出し  
 お座なりに藝者調子を合せてる  
 龍宮へうつ白波は女なみ也  
 日本の上り口から舞はづし  
 紫になる程つめる江戸藝者  
 あやふやな歌では啼ぬ時鳥  
 山吹のかはりにまづは菊をやり

雨旦 曲撥 樂志 釣好 一龜 紫雪 梅舍 有幸 瓢花 東平 瓢花 里梅 金牛 雨麥 松里 金牛 伊勢遊 田夫 金牛 板人

ぬかりなき人も踏込む戀の道  
 すい息子からい親父にあまい母  
 御妾の書籍ありやす草雙紙  
 ふられたる意趣には蠅を立て出る  
 雪の日に女房ちらくあてこすり  
 井戸を堀るのに足代を上へかけ  
 病みついた客にかぶせる夜着ふとん  
 彼岸だと言を姑女いきどふり  
 嫁のふみいつそいびられ申候  
 いなだ姫看屋の子と下女思ひ  
 お尻がちつとまあがつて濫い柿  
 青い手を突て二三日言のべる  
 そうしたらしまりもしようと嫁のさた  
 通らねばならぬ所に禿たち  
 外に家名もあるふのにしもふた屋  
 こげた飯鍛冶屋女房に叱られる  
 お先きへ拜見と女房文を出し  
 焼飯をほうばりめづぶち殺し  
 息子の寐言なせつめるく  
 送り膳何の魚相か追人が來

雨旦 里梅 松里 花好 里梅 煙幸 雨旦 新右 梅舍 煙幸 一夕 煙幸 梅舍 板人 梅舍 一夕 雨旦 猿子 清我 手枕

化た醫者手の出し入であらはれる  
 思案するかつば天窓に水がなし  
 尤さ持參丸わたとりかねる  
 からくりの上にごこわな太鼓うち  
 犬ころをちよつと蹴て行八つ下り  
 内儀を逃しまづ筆をひつたくり  
 かり豆のお客に馬をつけてやり  
 並んでたれて小侍しかられる  
 やいのく〜と姫ごせは御くどき  
 氣を取直し〜嫁はらみ  
 おやばからしいと本屋にぶつ付る  
 くらへども味ひ娘しよて知らず  
 大尾  
 夜も晝も尻から擧る宇治の里  
 賤丸評  
 御軍慮を千里の外へめぐらされ  
 拜領のぼた餅を着る御立身  
 光陰にたるみをつける閨月  
 幕串をちりもおわらぬ所こへ建て  
 趙高が一ちもつしかも馬のやう  
 氣の永さ錦木九十九本たて

樂我 歸厚 清我 飄花 好成 金升 雨旦 梅舍 金牛 梅軒 梅舍 釣好 雨旦 磯川 板人 一龜 磯川 釣好 保竹

漁父と見たのが樂天はひが目也  
 天地人かぶつて庵の煤を取り  
 江戸の關九十四萬でおツばさみ  
 すばまらぬ御扇子になる御立身  
 國道あるゆへ大佛饒にされ  
 月は妓女花は祇王と一とさかり  
 霓裳羽衣の曲をなし母へ孝  
 傘をさす手はもたぬ御立身  
 穴の中いわる是が秦んの間  
 橋大工砥水へ鮒をいけて置き  
 片乳房擱るが欲の出來初め  
 行燈を押へて擧る立ち習ひ  
 だけれどもしんぼうしやと里の母  
 權五郎目ざす敵は彌三郎  
 まだ正氣だと劍菱をやたらしひ  
 壹歩女郎を是也とは息子せず  
 不審紙だらけな四書の拂物  
 おやま所作事太刀打の神樂堂  
 仁和寺は鼎手捕は淺草寺  
 吉原の伏勢どれも赤備へ

一夕 キヌタ 坂下 一岩 其夕 金牛 同川 同川 太丸 磯川 金牛 梅舍 里梅 酒好 金牛 梅軒 金牛 雨旦 花好

上菓子屋仲におがまれ扱こまり  
 葉が来たら呼べと水併嗅てみる  
 にぎ／＼であわゝと笑ふ遣り手ばい  
 イヤア立派だと霜月十五日  
 隣の嫁を譽るのがくせ事よ  
 鴨よとよんでこけつこのびりを買ひ  
 いふな御用と鶏の毛をむしり  
 本堂へ鮮しを漬るが談議僧  
 片身こそ今は仇なれ中氣病み  
 錢あれば濡まじものを俄雨  
 床でとく帯たぐつてもく  
 大晦日閻魔の内へ鬼が来る  
 人間にならふと牛は喰つて寝る  
 鉢巻で立聞をする辛子かき  
 荷服はお日柄もよくけちな嫁  
 女房に手を抑れる病み上り  
 蛙こゝろに思ふやうくそ坊主  
 大尾

礫川 同梅 里梅 扇町 金牛 礫川 梅舎 松里 雨且 大權 礫川 キヌタ 梅枿 大丸 扇町 大丸 金牛 樂我 雨且

煤の日は太夫の部屋に内證の子  
 十三日役にたゝすは美しき  
 氣になつて新造鼠を撫育する  
 占かたになるのは龜の萬年目  
 地色をば伊東が館に御座の時  
 我身世に肌をふらぬを百へ入れ  
 人柱迄に請負度々倒れ  
 そこら中つめ／＼される三會目  
 何が出やうやらしれぬもの丸綿  
 座敷傘爪で鼻毛を抜て居る  
 鉢肴下戸とう櫛にして仕廻ひ  
 國家老わつちがほしい儘にせず  
 閻魔様どつちりきこし召たよふ  
 淋しさをうまく聞せる忍び駒  
 顔見せは仕立おろしの馬に乗り  
 淺黄裏うつ／＼として樂します  
 見ないふり遊よふと迄いつたやつ  
 魚すくふように浪人かゝんで來  
 時に斯ういふ理屈だと小便所  
 サア事だ髪ゆひ賃を一步出し

梅枿 金牛 礫川 同梅 松里 金牛 礫川 金牛 大權 礫川 同梅 雨且 其岩 賤丸 扇町 綾丸 賤丸 如猿

俳柳多留五十八篇終

酉の日に息子持病が又おこり  
 ほんに忘れはせぬけれど金がなし  
 かつもつてふる氣ではなし寝る氣也  
 振り新は禿に三本毛が多し  
 なんにしる春屋が喰た跡の事  
 大部屋を出て來る御用ほゑつ顔ら  
 つらい事眼も齒もよくて今一つ  
 二百が糞に仲間んの首計  
 門限がきれて淺黄が青く成り  
 あれあの火を見なせへと下女もがき  
 大尾  
 馬上だと斷る相摸見上げ果て

白人 雨且 手枕 礫川 林鳥 礫川 花好 金牛 金口 松里 板人

俳柳多留四十九篇

俳風やなぎたる後住むくにゆたか  
 五十 九

菅裏

和文評  
 是天のなす所にて御開運  
 雨風にまけぬ冥加な簀と笠  
 萬木に勝れて琴の音を調  
 松しまはかわらぬ御代の名所也  
 人はいさ白梅匂ふ小倉山  
 鶴へ乗る馬は翅の如く也  
 雛を巻く官女雪より清らかさ  
 古今の譽れ牢中へ勅使也  
 雲の帯衣々山にしめられる  
 青首をとるは治世の勇士也  
 泰平にせんじやうへ出る御樂師  
 手には鷹足には鶺鴒の目返し也

藤波 志夕 可笑 三松 杜蝶 青露 同蝶 新右 散売 亦樂 山笑

野馬臺の上へ字突がぶら下り  
洗ひばへしたは小町が雙紙也  
日本なら養山直ぐに時服也  
仲蔵が歌をちんぶん感じ入  
疵ものも入て名高い六玉川  
指折の弟子に八つ橋をも拜し  
鷗見てあれにして置け都鳥  
雪に寝た小松子の口にゆり起し  
忠孝は漆と酒を身になすり  
爪音を蹄にかけて嵯峨へ出し  
花嫁の禮を見捨て歸る雁  
文道は箸武道では櫂を持  
百ふしも並ぶ御庭の綿ぼふし  
七所ほどて白齒は見染られ  
人の子と通りすがひの名句也  
御祐筆人を遣ふも筆の先き  
何卒と十六筋で嫁を責  
鶯も蛙もよみし大和文  
大敵を知者三つ指で追返し  
只一騎せきとめられぬ勇しき

藤波 笑丸 遊高 器水 香貞 古遊 礪川 是樂 器水 カテツ 青露 春駒 亦樂 古遊 雨夕 葉千 青露 驚舟 留人 目多丸

嫁の母殊に／＼と目出たがり  
炭部屋は一入目立雪あがり  
梅壺とすいな咄しも御所のうさ  
淺間にも裾野は白きそばの花  
ふん切た母は機して綾錦  
硯の海を巻上る長い文  
鳥追は空音で通る江戸の關  
さなきだに重き筑摩の鍋二つ  
百増て成長させる妙義坂  
深い智恵有て淺瀬を聞て置  
紅葉笠召傾城にみたれそめ  
御師の旅宿に伊勢町はきつい事  
とつさんの迷子札だと御菜の子  
天道を見人に世界の太芝居  
三尋ほど兎へかける月の畏  
初大師一箇の庄を買て來る  
百人をのけて禮者を居らせる  
陳じてもかなわぬ親の照魔鏡  
琴三味線で奥中が不破の關  
皮切の三つはあつて父母の恩

手枕 器水 横好 龜樂 玉陶 半下 春駒 雨旦 三木 里松 喜丸 木賀 驚舟 同龍 天龍 萬仁 青露 古白 可笑 釣好

梅屋敷亭主年始に鶯菜  
隠し妻在とは主人相知らず  
袴だれ八重九重にしばられる  
櫛かいに裸にされることもかぶり  
こて／＼と左官の女房夕化粧  
是見やれ富を取たと市戻  
千金の一夜ぐらしは五丁町  
七里とはあるかぬ旅は子供つれ  
杉本が眞似も妾の謀事  
田樂で焼やもしほの親子中  
村芝居頼朝さまあ庄屋の子  
江戸に無い奴祇園で落を取  
まかなく十六の春きつとはへ  
柳の下の御事は夜たかなり  
させもが露を命だと下女もさせ  
鳩杖を突ても止め豆いじり  
床間で開くは下女の岩戸也  
錦鳥評  
御傍の松もゆるがぬ五徳しめ  
鶴へ乗る馬は翅の如く也

水治 竿下 酒好 辻木 横好 青狸 手枕 雨旦 雨夕 梅琴 龜樂 加丈 水治 雨旦 雨聲 二松 留人 山笑 青露

東海は御庭で木曾は御林  
御屏風は墨を付たて御寶物  
綻る梅に針ほど草めくみ  
我が年を積とは見えぬ寶舟  
御國がら蟬の廣さも世に聞え  
花の里芥子からそたつ女郎花  
正月は字を染四月紋を染  
雪にもふ足跡の有はせを塚  
それともと母は朝湯を覗く也  
白鼠穴を明るがきらひ也  
唐倭七十一字忠と孝  
郭公月を去る事矢のごとし  
金比羅さまへ御似顔の繪馬を上  
今炭を買たと見える雪の門  
思ふ事一つ叶へば神酒二つ  
年玉で目差の鶴を尋出し  
花も主に一度なる歌の徳  
追はねはよほどはつんだ娘也  
一寸の草にも五分の春の色  
物思ひそばで禿は春を待

和文 煙幸 笑丸 猿子 亦樂 三松 其末 青露 葉千 笠下 和文 雨聲 春駒 龜樂 金牛 亦樂 留人 笑丸 目夕丸 賤丸

ぞかれたも洗つた耳も世に響  
 扣かれた達摩の窟は内へはれ  
 鐵砲を廻ると鏡に引込れ  
 いつちいゝ事だとやたら餅をしい  
 唐の下女大和の國の二字を譽  
 ちつと見ぬうちに縁が松と成  
 繼親が啼と兄きが笑ひ出し  
 歌がるたつんぼと下女と餅を焼  
 炭俵敷石にする安玄關  
 木翠のよふな身とくやるかまほこや  
 大笑ひ谷中で杓子おつことし  
 おめへの氣猫の目玉と下女しやれる  
 おかみさまの御好には亭主大こまり  
 勝負附鼠にはねがはへて飛  
 餅につく娘は年もふける也  
 七種にたくは人の喰な也  
 年男瘧で鬼がまごくし  
 手が有て客の足をも近く呼  
 三河から切組て来る柱立  
 かゝさんへ地震がそんなにいゝかへ

笑丸 時住 鮑里 喜丸 雨朝 木偶坊 留人 器水 香貞 酒好 三木 茂柳 青狸 松歌 有幸 雨旦 同好 木賀 兔禿

古箒見を瘡の醫者かと下女思  
 下女出逢あこぎが網へ引かゝり  
 お頭巾になさいと花嫁わたをくれ  
 又一里近く成身も若やきて  
 看板も口を吸てる結納屋  
 足入と名付手入をさせに行  
 名山と茄子びを猿は味しらす  
 陸奥のはては牡丹の畑也  
 積てはわかれもつらき雪の肌  
 明て見ろ二兵衛が裏の梅の花  
 飛鳥の山で差たり押へたり  
 水鶏より和漢の鳥でたゝかれる  
 お節がらごまめ大根のとゝまじり  
 雪中に縮かへつて織て居る  
 齋日は閻魔も夫婦づれで出る  
 おいらんは乗せる禿は漕て居る  
 女房悦べ兩國で買て來た  
 てんほふにたかる虱の運強さ  
 天徳寺拜見あらば下女が圍  
 傘の引ときを着るむごひ猪々

香貞 龜樂 和田 時助 カテツ 物成 笠下 花町 鮑里 半下 雨旦 柳糸 福松 手枕 樂志 雪下 金牛 有幸

松脂で熊坂穴の毛をぬかれ  
 大尾 祝言は三つ組床は二つ組  
 初日の出我が衣手に松の露  
 武は藏め豊に暮す國郡  
 高砂は御代蓬萊は四里四方  
 寶にならぬ山吹歌に寶を入らせ  
 日月は燈火蒼海は油也  
 根上りの松へ響ける片男波  
 火が消て史記も左傳もつぶくさり  
 更衣の閑御馳走時鳥  
 幾疋も百足のつゝく惣登城  
 實のならぬ花を耻しそふに出し  
 首が有たら江戸中が皆氏子  
 藤波評  
 紫の都に瑠璃の御造營  
 日本一をふたつ見る日本橋  
 爪音は敵に引かせるはかり琴  
 國に無い花に楊貴妃名を殘し  
 年號も正き徳の御制札  
 唐迄もまねぐ薄の御名城

天龍 有幸 青露 春駒 里梅 驚舟 同樂 亦水 器文 和丸 笑水 梅舍 酒好 春駒 加丈 三松 半下 古鳥

京は菊葵は江戸の土に合  
 魚箒の無いので虎の御門也  
 鳥の羽を縫ふのは武士の手利也  
 實の王は右近左近は花の王  
 身の寶知恵は五つの藏から出  
 和の味噌は一夜造りの九合鹽  
 六つ時分門に片目の國家老  
 覆面んになると別ある雛の箱  
 ぬれた御衣隣の山で干し給ひ  
 御諱も御歌も道の真なり  
 御扇子は御運のひらく御印し  
 耳と鼻きくは鯉とほとゝぎす  
 笑ふので四百餘州の民は泣き  
 木綿から絹布へ落る孝行さ  
 まだ文も見ず雛箱のふたを取り  
 忠孝の道には曲る辻はなし  
 天然さ源氏の内を御定紋  
 日の光る君は源氏の目貫也  
 是まさに凡人の見る夢でなし  
 茶臼山粉なにしやうとの御障營

山笑 其笠 留人 金牛 雨旦 留人 喜丸 其笠 散壳 東平 器水 其笠 若蝶 可笑 喜丸 木賀 煙幸 其雪 古鳥 其流

一品んの菊を櫻の中へうる  
 櫻木へ埋木をさせる御立身  
 餞の穴あたりが丁度御木坊  
 鳥影の客は大きなすいめ也  
 又はだか此人にしてこのやまひ  
 繪のよふに櫻の咲た屏風坂  
 三本の爪を能ある嫁かくし  
 薄雲は七布を明けて三布に寐る  
 内裏造營四分板と小割也  
 名木の一本かれる湊川  
 富士は雪すそ野あた鷹花茄子  
 十八に分て常盤の御稱號  
 其まゝに御盆太ト輪に遊され  
 今の御代ざつくと着るは鏡計り  
 吉日に杜若の紋を大工建て  
 富士の夢明る日雪の衣を召し  
 ふられても滯すに伽羅の下歌を召し  
 なる程と指を折らせる杜若  
 御吉例移の角ももげる也  
 梅の花五つならべた御縁日

散 文  
 和 鳥  
 古 好  
 釣 枕  
 手 松  
 三 且  
 雨 旦  
 シ 卜  
 散 壳  
 葉 千  
 其 末  
 金 牛  
 其 流  
 物 成  
 和 文  
 散 壳  
 可 笑  
 和 文  
 散 壳  
 晴 風

中指を折ると明智はしてやられ  
 五六文長くて親の手にあまり  
 神佛へ後家空錠の額を上げ  
 持參金切れのある面ら計り也  
 むすこの千社九郎助が仕廻也  
 かゝみ山忠義は下女の天下一  
 しら波におどろき千鳥音を發し  
 玉のいゝ所へ目のよる格子さき  
 鬼の豆まきおらあ内く  
 四つ足は喰ふもくはぬもあつたまり  
 花嫁は桃のやうく年始也  
 猫と馬黄色な聲でいがみ合  
 吉原は櫻さへ實はもたぬ所こ  
 こはめしが出たかとおびきびいがやみ  
 下女が閨竹光公の御來臨  
 さりとては又おしい事穴がなし  
 大王のもん日遣り人もついて出る  
 錦鳥評  
 花よりも松の都と唱へたし  
 御扇子の風で味方は暑にまけず

金 牛  
 み つ ね  
 樂 志  
 賤 丸  
 留 人  
 和 文  
 艷 里  
 樂 志  
 綾 丸  
 辻 木  
 里 梅  
 芋 洗  
 紀 樂  
 木 賀  
 金 升  
 志 丸  
 津 邑  
 有 幸  
 亦 樂

勅額へ手のといくのは春と秋  
 孝行と神慮和漢の厚水  
 廻らずに持つは撞樓の水車  
 づぶぬれに成たで太田名が高し  
 嫁のかく辛子がさいて始泣き  
 八重垣の内へはいれぬ唐詩選  
 郭公娘にくどきおとされる  
 嵐より雪より雨で名をあげる  
 ながれる沓をうけたのは張子房  
 お月さま丁度甘ちに成給ふ  
 きやつくと手はづを配る割普請  
 雪げして鞆が瀧は亂びやうし  
 千雨出した口留は世に知れる  
 よくもめた嫁は紙子にやはらかさ  
 山路を鹿は見事にあゆむ也  
 送り膳美しいかときいて見る  
 翠爪はまらぬ程に世帯じみ  
 萩の戸の風にも母はおきて見る  
 糸道のよこへされたが戀の道  
 初登山岑にはくらしい道はなし

志 夕  
 里 梅  
 三 松  
 金 升  
 ヒ 助  
 カ テ ヲ  
 木 賀  
 里 松  
 散 壳  
 艷 里  
 柳 水  
 カ テ ヲ  
 三 松  
 志 丸  
 加 丈  
 夢 中  
 斗 丸  
 青 露  
 散 壳  
 斗 丸

神にうらみはかづくごさる疱瘡  
 柚子と桃なる程かゝる軍也  
 けんどんを配りによほうな夫婦こし  
 實方を四五羽生取る雪の朝  
 煮ころばししごく大事に座頭喰  
 いつもならけふかざるねと娘待ち  
 鶴ヶ岡石生娘のやうに出し  
 ふつりりんきせまいぞと母いけん  
 馬の耳蛙のつらに母こまり  
 手まへのが出来りや禿のすそが切れ  
 蛇の病氣此節蚊さへ通りかね  
 三の夢獲一口にしてやる氣  
 美しい下女で見にくい事が出来  
 あゝも似るものかと網は空をねめ  
 ちよんの間はわたしが部家と下女がしやれ雨朝  
 是はくゝと母のまつ遅櫻  
 にへたつた女房へ下女が水をさし  
 さいそくに座頭目鼻を付る也  
 宇治橋の下たに盡てん張ている  
 坂東が銀杏であてる川柳

加 丈  
 津 邑  
 古 鳥  
 笑 丸  
 三 木  
 酒 好  
 三 木  
 東 平  
 驚 舟  
 雪 下  
 金 牛  
 木 賀  
 眉 長  
 里 松  
 雨 旦  
 其 雪  
 雪 下  
 庭 花  
 是 樂

純友がきてさそひ出す花の山  
 盃を真中にさし嫁はにげ  
 初午の娘鳥居をことわられ  
 かあいさのあまり泣かせる二日灸  
 上段をくるふ御間かと下女思ひ  
 るちごから鹽の廻つた甲斐もなし  
 殿さまは我のせ兄を馬にのせ  
 ひやくにあらたに切れて下女こまり  
 足のぬけがらを茶碗と取かへる  
 餅草も化るとあつい團子なり  
 おつかさん坊もいくよと目を覺し  
 夫ともと母は寐巻をみつためる  
 何とて待はつれないと淺黄言ひ  
 晝過ほふろく朝は櫻草  
 百座敷きこえませぬぞ才三さん  
 わたしのも戸さぬ御代と下女しやれる雪  
 酒好評

和文 木賀 如猿 志夕 香貞 井蛙 里松 菅裏 東平 艶里 釣好 遊高 里梅 香貞 亦樂 里梅 東猴

武のつよい國逆たのは水計り  
 御目出たさ馬もはやめの御使者也  
 歌の徳時鳥まで梅で啼き  
 一國の錢は四角に廻るなり  
 孝ぞつもりで扶持となる有がたさ  
 そもく松の化物を目出たがり  
 穩さ矢狹をてつぼうがぬけ  
 美濃へ穴明けて三河を嫁覗き  
 桃の背重忠程に嫁をせめ  
 清濁をわけてもてなす雛の客  
 一とこゑは鶴にも増るほととぎす  
 御高盛り寶永の頃かさへわけ  
 雛のしん極大切に嫁は切り  
 扇おつとり立あがる鐘の寸  
 旅僧へぬれ手で粟の飯をしひ  
 十軒の家さがしをする奥御用  
 柿の歌となへてしふい眼が覺る  
 生田びかじたいに及ぶ嫁の戯  
 かこち顔して月の夜の手くだ也  
 花の山下戸は香のあらし也

金牛 里梅 留人 古白 春駒 其流 藤波 金牛 雨旦 里梅 可笑 其笠 釣好 東猴 三松 亦樂 三松 金牛 梅舍 釣好

ふもんごん二十五もある候の文字  
 竹村をくふのはふしの無い女房  
 これがよく着られた物と御虫干し  
 十三はばつかり町の出来はじめ  
 三河にはなくて難波に眞半分  
 兄よりも弟は十四多いなり  
 あつたかなやつにはとける雪の肌  
 樽枕計り此人このやまひ  
 入れかけて名ごりをおしむ雛の箱  
 あびた酒ざつとふり出す袖の梅  
 なま長い名の客人のむづかしさ  
 新世帯ほどはかつて初初雛  
 榊より猿の先だつ小牧山  
 兒まげのやうにして置琴の糸  
 つうじのけいこはこくうにおかしがり  
 燈もとろり禿もとろりくも也  
 もてた盃すわけて嬉しく眠くなし  
 すけんとはしらぬが佛かごいかご  
 豆いりの手は止む事を得ざる也  
 脚あつて苦もなく讀る妙智力

芋洗 三松 春駒 ヤマキ 木偶坊 同梅 里梅 比助 岩猿 古鳥 鷺舟 雨旦 ヤマキ 志夕 古白 釣好 梅好 若蝶 天龍 里松

柿と餅和漢で寐ものがたり也  
 梅屋敷禿もついのうぐひす茶  
 天神は昔こゝにと御菜いひ  
 ヲヤにくらしいとたぐり出すべた晚  
 右手左手上下段造り手の目  
 昔々あつたとさ今浪人  
 そのさまで雛かと亭主はな毛也  
 母の雛しやちこばつても壁にされ  
 まゝ事のけんくわ家財を没收され  
 たがいにゑいやと引拍子百おとし  
 おいらんにしかられいとけちな晚  
 下女が色山葵おろしをにぎり合  
 下女手代三里と尻のこみを吹き  
 するはづの池だとしやれるするい後家  
 下女いやとマアそふいつてみた物さ  
 ふと棹で後家を泣せる三の切  
 サアまくれくくと御關所  
 錦鳥評  
 凡人の細工に出来ぬ高枕  
 御領地は九曜の星へ六をかけ

新右 水治 夏木 綾丸 板人 猿子 花町 松里 木賀 綾丸 ヤマキ 雪下 東猴 木賀 金牛 藤波 猿子 半下 古鳥



御前筆書師よりはれな馬を書き  
 九つの星であかるい和歌の道  
 さわらびも菜もやわらかな物語  
 おたやかな雨がぼたんへ二度かゝり  
 君が代の雨は牡丹へ二度かゝり  
 初かつは跡先を見て喰はぐり  
 萬木にすぐれ四海に枝をたれ  
 月雪にもめる扇のはなやかさ  
 松を切り竹を吹くのも忠義也  
 仰向けば花うつむけば鹽干狩  
 洗はれて笑はれ草の種をまき  
 嫁にたのまぬ針めどのむつかしさ  
 傳奏を嫁のつとめる桃の御所  
 花の山空に知られる銀世界  
 三夫婦の口にはこまる水かげん  
 莊子が夢の飛あるくうらゝかさ  
 節句前箱で取こむ女の子  
 内中がはやおき家も寝かさぬ氣  
 日が西へ入るとむすこは北へ入り  
 足がるに早ひきやくとはいひ見立

春駒 同 三松 青狸 金牛 杜蝶 同 燕好 酒好 梅鳥 古鳥 三松 青露 古鳥 杜蝶 其雪 香貞 雨旦 金升 亦樂

寝てまつたくわほふを妻うみおとし  
 ふらそこに酒の壽命のすき通り  
 臍をほりからして臍をかちり出し  
 直が出来てたましい入る無一物  
 紙ひなのかしこまる程母は老  
 おすき見をまぐるの事と下女思ひ  
 櫻からかへれば女房雉子の聲  
 引馬に駄賃をやるはけちな客  
 田樂で夜喰かたまりみそをつけ  
 ながし眼で龜の見ている後家あひる  
 けいせいはい休のないに母こまり  
 終所は丁目織たは帳の紐  
 尻くらいくわんおん下女がひねり出し  
 朝がへり母猪牙舟のかちを取り  
 夢計りなる手枕に下女はらみ  
 月にゑんこうきたないと下女思ひ  
 遣人では無くて取人のばゝあなり  
 遣り手とはいへど二階の取り人も  
 木娘はもふ愛教のこぼれ梅  
 鶴の後ちゆくへの知れぬ猪の早太

散売 月圓 天龍 月圓 青露 香貞 古白 近勘 晴風 金牛 和文 古鳥 龜水 水治 雨朝 柳糸 東平 其笠 杜蝶

三日月の櫛に柳のあらひ髪  
 加賀みやげ雨と日和を持って来る  
 行かぬはづ下女はゑんこうだいし也  
 つよく見せよわき安宅の杖のさき  
 針箱がつぶれまするとひきく言ひ  
 手のついた下女は五日に尻をすへ  
 りんびやうと號して馬に乗りたがり  
 やきながら女房一人でくつている  
 なむあみたぶつもふ聲が極つた  
 すゝびたる雛にも嫁の一とくろう  
 雪の肌へは振るもふりとけもとけ  
 孝は釜不孝は母の臍を掘  
 五右衛門びつくり權兵へが足をふみ  
 夕顔を枕にてゝらひつばつし  
 おそく来てはア目出度しかられる  
 置右衛門が来てしちくどくしやべつてる  
 大尾  
 六あみだ女房羽二重餅のやう  
 鷺舟評  
 月と日を居て明るき三箇條  
 鱗鳳も出よ直ぐ成君が御代

古白 其笠 遊高 其末 夢中 眉長 夏木 酒好 物成 夏木 金牛 可笑 古鳥 同 岩猿 一露 庭花 和文

三綱を張るは五常の御成道  
 水菓子に沓冠の掟有  
 五百坪千代田の松の生茂り  
 身の丈ケに除る二人は師の教  
 尊さは九月の花に四月の葉  
 雪の夜にこりかたまつた鹽が解  
 五七五に折目のわかる唐衣  
 汐の差引大海の息遣ひ  
 此花を見ると唐迄貌を出し  
 忠臣の鳥居は朱になる覺悟  
 浴衣着て出る時筆の軸も切  
 一つ家仁在て出かわり静也  
 其當座こがねの鶴ヶ岡と言  
 水菓子の火に成ほどの御怒  
 我が門で鞠躬如たり朝歸  
 ヒッ呵り忠盛様で手を洗ひ  
 鶴の雲遊て行跡に郭公  
 唇はさんごじゆ齒にはるりの露  
 燕のやうに大名子を拵へ  
 椎の實で戀のいろはを書習

雨旦 其流 藤波 喜丸 其流 艶里 古鳥 友松 亦樂 半下 無譯 香貞 山猿 木賣 散売 同 杜蝶 留人 雨朝 海老

つまづけば姉が手を引小倉山  
貸本を母の投込座敷穿  
神に九頭龍里芋に八つ頭  
灰吹の蛇は龍王の烟で出来  
替玉に月をして行郭公  
小道具や見入た鮫にけふも来る  
周倉も貳百貫た初轍  
化されて三圍廻る中反甫  
おのれ時平と黒雲の絶間より  
神農も賀草計なめ残し  
海山を仕出てたつた一かつぎ  
見臺は唐天竺の客座敷  
弦音に御里を的に矢のごとし  
椎たけを出しに芝居を嫁進  
御座敷の似貌を大工懐中し  
何時だ女三の宮に聞て来な  
心盡しのナアト嫁はひき  
陸士衛雁の便を狗でする  
譽ながら立て受取藤の花  
瀬戸物や投賣にしてかけが出来

岩 其 亦 雪 留 志 三 晴 賤 猿 龜 鬼 可 里 其 香 古 杜 雨 同  
猿 雪 樂 下 人 夕 松 嵐 丸 子 樂 禿 笑 梅 流 貞 鳥 蝶 旦

客を釣る文に蛭蚓をのたくらせ  
山に波立ば夫も道を立  
歌でさえ業平は手をにぎらせる  
釣臺は明くとよろけてかつぎ出し  
子牙ない錢で糸を買竿をかひ  
鯉の手紙三月と書て消し  
子福者の毎夜寐所のさかい論  
持て来た社領で荒る山の神  
女房がわたを抜てる初鯉  
讀さらぬうちに取なと姑言ひ  
無くばマアこもでもいゝと太田言  
名にほれて長命丸を姑呑み  
品川へ醫者で行のは古方也  
また鐘遣けんで吞でるせよ酒  
あゆひやれて打太郎兵衛が種が島  
鼻色が持參いかぐり縁女也  
番太郎むくれて居るとかたわ也  
大尾  
饅頭の毛で氣のそれる光大寺  
同評 感吟九員  
有難き紫矩の道に塵はなし

手 雨 同 晴 散 葉 喜 新 夏 酒 其 雨 松 雨 壳  
枕 旦 風 壳 千 圓 右 木 好 末 旦 里 田 洗 圓 朝 丸

白い鶴規短準繩の上を舞  
武藏野の月より今は武の光  
虎の半てんで御園迄一と走  
何時も起らぬ論の境炭  
青雲の心鏡であきればはて  
鶴鶴も家老も片目無て濟  
三人が寄て笑てこけ出し  
不老門唇で水を盛てたて  
錦鳥評  
繁昌さ臥猪の床も町續き  
千貫で駿河の田畑賣のる也  
文道は筑紫武道は廢也  
雜に似た御客へも出る囃子方  
紫に湖水で藤の色を上  
朽木より命の親がとんで出る  
鐵砲のねらひはつれぬ五百挺  
和漢とも船と屏風は手詰也  
雨にぬれ雪に轉んで名が高し  
目移がして頼政は一首詠  
和歌草の末世にかれぬ小倉山

金 友 友 金 雨 杜 新 山 板 柳 手 春 板 龜 志 手 梅 雨 雨  
牛 松 松 松 朝 蝶 右 水 人 系 人 丸 枕 鳥 夕 旦

閑子鳥とよふを買ふも小半道  
山吹は譽たが太田ぬれた儘  
水無月の布子は天へ届きそふ  
此花を見ろと唐迄顔を出し  
鍋ふたが沉んで浮む釜のふた  
冷飯を喰ふと正雪知れぬとこ  
高砂の夫婦は顔に四海波  
豆腐やは浮み紅葉は沈む也  
拜領の頭巾梶原ぬいちゝめ  
泥水で住吉の田を植て居る  
又來る爲だ貸もせと越の傘  
おふくろと親仁は箱根よりあつち  
打波も七里はだふたふと打  
伊吹山露にぬれつゝ怨逢  
孝行の道に届かぬ橋をかけ  
一心の外に連なき孝の道  
替玉に月をして行郭公  
緋の袴こしをかけたが化仕廻  
しにめをも下たから讀す恭の上手  
初轍妾だんく上を見る

雨 藤 雨 亦 辻 喜 友 酒 樂 山 里 庭 喜 志 散 留 琴 其 金  
夕 波 夕 木 圓 松 好 志 笑 松 圓 花 丸 壳 人 系 末 松



六月へまたぐ五月の雨の足  
吹屋町だから折々あたる也  
棟梁は上手の手から水を盛  
紙子計が和らかな姑也  
此山で銭を銚たかと同者聞  
水賣の身過ぎぞ夏の印也  
母親を穴のむじなが来て化かし  
川中のからくり武田大はたき  
筋違の近所で直ぐな道へ入  
いまだ参上いたさぬはふられたの  
花に馬繫で七日淋しく寐  
錦鳥評

水治 志孝 半下 三松 有幸 板人 有京 志九 雨柳 目多丸 留人 雨旦 同水 器水 三京 山猿 山猿 三松

引越した先もとなりには戀虫  
玉のよふなると御使者は汗をふき  
ひやうたんの根絶し暑い盛也  
凡腦は曲り菩提はすつと行  
井山といふ時山吹をくんなんし  
鶴ほどに首を伸して舟は待  
五月雨に世話のかゝらぬ内職  
その常座樂天風の心地也  
歌の徳天も感涙ながすよふ  
花の仇雪で打たる本望さ  
山吹を取たが娘返事也  
二つとは火入も暑き涼臺  
下手の釣やたら太公望にされ  
車では浮み舟では沈む也  
見たより軽いと産籠かして遣  
大病の猿は解もなめかねる  
急ぎ候ろふほどに晝夜をくらひ  
からし味噌鹽の目をして譽る也  
竹村の月を朝日の彌陀へ上  
目に乳を差たがほんにくされ縁

賀好 可笑 杜蝶 柳糸 雨露 青露 和文 手枕 芋洗 和文 山笑 雨夕 其流 雨旦 美山 有山 雨柳 志孝 三松 夏木

内陣へみすを丸めて入て置  
似せ升で田舎をはかる旅役者  
たばこ屋が宿で葉向のいゝ妾  
馬にはちつとおとり人には並はづれ  
のらくらとしたよに鰻薬也  
綻を頼み糸脈引て見る  
大道へ氷の出来る暑い事  
けちな客雪の無心にいざさらば  
子の迎ひ母の出て来る大恩寺  
旅歸り此箸紙はたれがのだ  
切に成たと蘆久保の水を呑  
信濃と相摸上下たの大喰ひ  
盗人の方から亭主五兩取  
蠅が陣引けば又蚊がときの聲  
いぶされてもえ立胸を嫁押へ  
お妾の味噌を喰てる柏餅  
割れ鍋を金でいかけて縁に付  
眞實と啞でかためた柳橋  
鼻うたのきせる疊をおどつてる  
魚箒に堅くて初ては齒がたゝす

山猿 散売 常住 東猿 山笑 山猿 雨朝 山猿 散売 古鳥 三松 有幸 雨朝 山笑 其笠 散売 クツワ 眉長 器水

ふうくを言ふはづ尻を抱かせられ  
鬼すだれせふきは見えぬ仲の町  
ひとり寐も添寐もつらき身の勤  
いぶされる嫁蚊のすねのやうにやせ  
誘はれて帯が左りへ廻り過ぎ  
ぐつと手に取ると水音高く成  
銀包醫者もやつぱり脈を引  
翠帳紅閨唐人の名と思ひ  
本生たがわす花紙で追拂ひ  
朝歸り親仁團十息子ぐにや  
乳貰の道々しほる袖と乳  
門口へ増鹽をするけちな客  
初花が咲くと垣根の母支度

酒好 近勘 山笑 夏木 古鳥 其笠 三松 庭花 東猿 笠下 留人 マイタ

俳柳多留五十九篇終

俳柳多留六十篇

和文評

國々へ枝葉の茂る御代の松  
 夢の間に和漢へ薫る梅の花  
 八雲から次第にはれる和歌の道  
 燃出づる草を氷で薙ぎ給ひ  
 雲非迄御手の届いた御庭也  
 紫は末世に白き名を残し  
 行らんの一首は八重の垣と成り  
 冬枯に無地に流るゝ立田川  
 能い折に咲いて名高い杜若  
 上を見てほうづの無イは千羽鶴  
 御凱陣無事は古郷へにしき也  
 御しとねの下たに尋た歌がるた  
 白石の礎御家のかため也  
 孝貞に和漢二つの虎が石  
 實のならぬ花で實の有る返事也  
 紫を人の奪はぬ御留川

志夕 金松 雨旦 手枕 可笑 其雪 雨且 驚舟 木賀 斗丸 驚舟 留人 亦樂 山笑 杜蝶 金牛

二聲と啼かぬ小倉の郭公  
 大江山保昌流の舞をまひ  
 升形は空音を計る關でなし  
 七本の鍵は武勇も一つ本木  
 雪氷解けても水にならぬ孝  
 花と花八重になる日は蝶二つ  
 樂天も渡りかねたる知恵の海  
 學に實が入つたで麥を皆流し  
 一所存在るできれいな城渡し  
 須磨寺の花には指もさゝぬ也  
 母親は曇れば旅の空を見る  
 生きたより後藤が馬は直が高し  
 唐韻も茶摘もよほど聞覚え  
 霞から秋風迄は長いうそ  
 紫と喜撰は江戸の水に合ひ  
 朽木から源氏の運の芽を出し  
 志し松葉に煙る佐野の雪  
 十番をはいて小栗は恭盤也  
 水鳥の羽音が夢の覺めはじめ  
 到來の鯉へ直ぐに羽根がはへ

賤丸 里梅 是樂 古鳥 散売 手枕 驚舟 加丈 シクト 古白 賀好 加丈 驚舟 志孝 山丈 三猿 山松 古猿 白

寢返ると近江へ近いみのぶとん  
 米と夢えかけぬ心がけ  
 其扇くれさつしやいと村子ども  
 花陽道土手で親仁に逢つたやう  
 お妻は禮義を知つて不首尾也  
 弓と成る父母へ矢たけを嫁盡し  
 笠縫の手元山また山巡り  
 さかぬ氣の唐人耳の無いやつら  
 女竹裸にならぬしほらしさ  
 天人の化粧足代などをかけ  
 廿四も孝三千も孝ざんす  
 舞つて出た時は鼎がぶつさらひ  
 漕ぐ船の鼻へ小まりの竿を差し  
 女房が威有つて猛き朝歸  
 まあお聞きなさいと嫁の朝歸り  
 そばかすが有つて二八の厚化粧  
 薄すらと十六夜の頃すゝきはへ  
 三分のもわたしがのもと下女のかし  
 大尾  
 豆を喰ふ齒も無く成つて鳩の杖  
 錦鳥評

金牛 梅枿 梅鳥 シクト 岩猿 マイタ 其笠 住遊 葉千 有幸 常住 里松 加丈 里松 杜蝶 晴風 山笑 葉千 三松

木地は照り極彩色は光る宮  
 是を入ると四番目が茄子也  
 御扇子で笠押へる關ヶ原  
 執事札を枝折に立てる花の山  
 名の高い櫻備後と薩摩也  
 賑かさ古今武總の涼舟  
 幾千代も後家は風雅な名を残し  
 末世迄雪で明るき學の道  
 小便は五文字雨には十七字  
 孝行さその身の肌も冷え氷  
 忠は書き孝は櫻へ乗せて賣り  
 隣國の牡丹をにらむ鶴が二羽  
 神國の蜘蛛は詩歌の道しるべ  
 寐た家を身を粉なにして引起し  
 出る月の和漢を照らす三笠山  
 尻の火で車胤は胸を明るくし  
 ひんやりとするは氷の土用干  
 夕立と雪見の間に秋葉道  
 沈むほど乗て亡者をうらませる  
 山吹の茶漬喰ても身にならず

古鳥 亦樂 柳水 有幸 古鳥 亦樂 庭花 雨期 錦重 里梅 手枕 葉千 驚舟 常住 梅磨 樂志 斗丸 雪下 山笑

暑い事狐を片身井戸へ下げ  
虫賣のそばでせんひり虫が啼き  
腹に月見えるで嫁の花が散り  
看板のやうなら天狗長かろふ  
貞女兩夫にまみえたで子を助け  
すきや川岸とは奈良茶やにいゝ所  
縁遠き三味線もたけ琴もたけ  
百合の花誤り入つて咲いて居る  
肩あげもおりぬに尻が綻びる  
あたまへ目高買て来る河童の子  
ぬれ佛元を糺せば色出入  
雷の太鼓でふれる入梅の入  
今晚は義仲寺の句と淺黄しやれ  
紀伊國は八日尾張は九日也  
横に寐る娘は親をたてすごし  
久助を箱入にして暑氣見舞  
危相な細工結構な土地で出来  
職分をみがく玉やは能く光り  
黒鯛を遣るとはすいな留守見舞  
おたふくで能いはそら豆ばかり也

酒好 水鏡 金牛 岩猿 其雪 庭花 シクト 鶯舟 雪下 玉幸 有下 半右 新右 有幸 柳水 散下 晴壳 京道 志夕

つゝらからお化を出して下女は干し  
かごのへつゝいへ女房の釜を入れ  
鯉節の所勢ぬけたをそばや干し  
盃を出した芝居は人に酔ひ  
子福者の女房馬上で安氣也  
松坂は八助伊勢は八兵衛  
曇つてる時に狐は嫁入らす  
油虫豆へたかつてどくづかれ  
足の有る女房亭主をふみ付ける  
聲色も唄も似たりの安涼み  
四ツ目では眠る八ツめで開く也  
素一分の無念四ツ手に追ぬかれ  
佛師屋は佛のにくで蚊をいぶし  
志夕評  
泰平さ知者も勇者もしれぬ御代  
日々に色増は常盤の都也  
淋しさといふ秋はなし花の江戸  
萬民の咽を潤す松の露  
松のかげ疊の上で月見也  
浦舟はかくれ名歌は世に残り

玉是 其流 手枕 辻木 山笑 杜蝶 住遊 酒好 樂志 マイタ 若蝶 喜丸 板人 鷺舟 目多丸 近勘 玉可 笑

蓬萊の地をかためるも鶴と龜  
日を抱いて月をおぶつた咲屋姫  
洗濯でさつぱりとした和歌の論  
御捌は丸し掟は四角也  
能い眞似を賞し給はる孝の徳  
一箱は思案の外で立つ煙  
神農は鑿草で舌を切り  
空解けをせぬのは縹子も年に耻ぢ  
薄では手も切れ指もきれる也  
見物で氣のはる鶴の料理人  
咲く花も殺さぬやうに池の坊  
遣ふのも溜るも金は面白し  
堪忍が味方短氣が敵也  
花瓶へ身を投入の若隠居  
其あした渡邊手持ぶきた也  
心にも無いあくたいは盆踊  
鍛樂の種とて鋤間なくかせぎ  
嫁芝居顔の仕上げもふたい香  
女房ほど母の迎はこはくなし  
朝がほとゝもにしほるゝ朝歸り

里梅 新右 三松 和文 東子 加丈 錦重 玉水 山磨 辻木 雨旦 花町 水鏡 梅鳥 常住 里梅 有幸 三松

秋風をよける持參の金屏風  
人橋をかけて玉屋は響させる  
取膳で鉢合せする中の能さ  
とうろうへたかるは里の油虫  
親どうせうと不孝者言初め  
氣ばらし程は給んすとうまい首尾  
醫者の奥の手もやつぱり逃る也  
さかなやはから半葉をしけく見  
釣て来たのがおかしいと女房焼き  
なかねはず鬢が買つたきりくす  
四會目へ行かぬは損と母へ言ひ  
なんともおつしやいやしとちれ髪  
善の綱目差のやうにぶら下り  
弊自慢下女挽白のひきがたり  
肌ぬぐと命をかけた女房出る  
つぼ口をして首をふる流ッ柿  
三會目お花おとるが罷出で  
勸學屋迷をうぬがのやうに見せ  
相性を見てとぬかすは下女奢り  
錦鳥評

葉千 庭花 留人 喜丸 玉猿 山坊 木偶 庭花 近勘 樂志 マイタ 和文 杜蝶 葉千 志孝 板人 金花 藤丸

鏡山裏は湖水の天下  
 御祐筆繪師ほど馬に骨を折り  
 二つ無い山を三つの内へ入れ  
 居ながらにひろふは濱の眞砂子也  
 壽老人ほどに御壽は愛す也  
 白猫を鼠の袖へ申請け  
 越前と越後は橋の内と外  
 美しい目元で蜘蛛の巣に見とれ  
 花の咲く方を頼政申受け  
 花の姿を梅干の中へ置き  
 寒國で織た着物で暑を凌ぎ  
 子ゆゑの間にあかるみへ常盤出る  
 鳩の喰ふ豆で喰つてる繁昌さ  
 看經の後ろでいぶす嫁の孝  
 櫻にはゑもん梅には袖が有り  
 春先は咄しの高い伺鳥や  
 唐銅の鳥居で蟬は焼どをし  
 月を掃くやうに薄は穂に出る  
 時宗は矢の根は有るが弓はなし  
 なまけると天秤棒のてんは逃げ

定岡 目多丸 里梅 同幸 有鳥 古駒 春虎 千虎 散壳 手枕 京道 龜樂 目多丸 板人 刀鷲 賀好 辻木 山住 常住

村の蛸せなあゝてる芋畑  
 六右衛門の中で五右衛門一首詠み  
 腮をうちには遣はせる美しさ  
 とぐやうに鏡が池の水すまし  
 姥は山娘は月の里へ捨て  
 御相談なら御無用と月の事  
 松茸を切るのに嫁は松へ行き  
 暑い事帆をかけて行く牛車  
 青貝の先箱で来る黒ん坊  
 子子の身振でおどるばかばやし  
 盆踊だてにつれ立つ手長鳥  
 附木やのかゝあ亭主をつつく見  
 收月を旦那の尻と下女思ひ  
 早く目が覺めたて内の飯を喰ひ  
 もうだれか來てもと糖を一つかみ  
 刺刀に羽子のこほどな息をかけ  
 水をぬふやうに遊ぶは針目高  
 間のわるさ聞ふの四つに乗つ付る  
 内兜見ぬいて妾組しかれ  
 朝歸り敷居夕都のふとんほど

雨旦 留鳥 梅幸 有牛 金蝶 杜枕 山猿 刀鷲 鷺舟 雨旦 庭花 千虎 笑丸 龜樂 水鏡 半下 新右 山猿

喰付いて逃げるは戀のいろは也  
 抱留めた手柄權兵衛五郎丸  
 氣晴らしほどは給んすとうまい首尾  
 箱根からあちらの嫁を暮に呼び  
 打て来る帯を息子傘で請け  
 御代參には喰たらぬ進の飯  
 板人評  
 御老牀だけに御歌も夜や寒し  
 諸國から鏡の國へ駒を引き  
 破魔弓は光陰の矢の引き初め  
 深淵に行き薄氷を孝子踏み  
 いゝ鳥を石田に着せるおしい事  
 たらぬ乳の足しにうごかす管籥  
 權六は瓶彈正は釜を割り  
 異國とは琴かはりたる太鼓の音  
 唐崎は一本琵琶は水調子  
 御切戸があくと御庭の日本橋  
 白菊はまどはせ月はうたがはせ  
 歌を忘れて目あかしの神と詠み  
 白がねの猫眞黒な手で貰ひ

伊せ遊 三京 山猿 樂志 古白 喜丸 雨夕 其流 山猿 器水 和文 素牛 木偶坊 刀鷲 ヤマキ 加丈 後丸 葉千 伊勢遊

琴三味は箱迄反りがあはぬ也  
 國家老撥は袋へ納めさせ  
 弱ものゝ交り和歌の四天王  
 鐘の聲風に伸びたり縮んだり  
 猿曰く周公旦はたべつけぬ  
 鹿の脊を分けて晒にしみが出來  
 備後は詩薩摩はやまとうた  
 右でひつかいて左で嫁たゝき  
 鈴の音に來るのが客の三番叟  
 榮果の夢はさめて乗る五十間  
 しやれた年玉で一休申入れ  
 水引草の結ぶのは露ばかり  
 長者町賣の山の麓也  
 目が覺て見れば敷居も高くなし  
 誰ぞや此夜中と質や戸を明けず  
 是が和の昌平橋と通辭言ひ  
 一番に錢金の山田舎見る  
 道明寺他人の詰めたやうでなし  
 蛤も女郎も月にしんきろう  
 月の穴明けてあかるく内へ知れ

新右 志夕 五連 辻木 柳水 器水 山笑 三松 同笠 笠下 杜蝶 半下 有幸 亦樂 青露 雨夕 香貞 柳露 雨期

醫書に無い事名月が耀のたね  
切れますといやれど伯父のつけ焼及  
殿さまへ魔をさす猫の美しさ  
けんぼう流を稽古して皆わすれ  
草臥たやつが見付ける一里塚  
唐もろこしを重言ときいたふう  
其明るばんも射留める源三位  
傘を輪違ひにさす伏見町  
ざつな木戸石をつるしてべさせる  
おつとせい轉んだ薬だとたわけ  
此事のみは御自身の御しんまく  
につこりと満珠を握る御忠節

錦鳥評

文のみか武にも小松の御遊也  
水は逃げ鏡は爰に踏止め  
御太鼓で開くは散らぬ櫻也  
神國に不時をねだつた親はなし  
お脈をと我が爲ならぬ手を焙り  
信濃路は武勇も月も影が有り  
三日月の弟子の北斗が芝へ飛び

三松 香貞 雨夕 鷺舟 龜樂 和田 五連 山花 酒好 新右 里梅 金牛 山笑 松里 雨夕 新右 其流 古鳥 一河

萩の土地紅葉はとんと植付けず  
賤心有つて實の無い花を出し  
犬に虎けしかけたので猿が勝ち  
飛石にする程つよく帆かけ船  
孝の徳美濃は生酔だらけ也  
片腕でたくさん有と關羽打ち  
目を一つ持つたが坐頭出世也  
賣聲は雛の伸びてる干だいこ  
本牧の鼻へ杉田の梅かほる  
紺地に白き立葵こま廻し  
緋威を木曾は巴にねだられる  
三味線の手も草臥れる山盡し  
針ほどなもの棒になる雪景色  
鶯のまゝ子も梅で一度啼き  
無理留の加勢に雪がちらく  
冷酒の者に禿しかられる  
かくし懸する頭袴しわに成り  
きつい陸嫁にまかせて置ます  
下た心有つてうは氣なはなし也  
親も子も大物入と仲人しやれ

五連 有幸 木偶坊 梅鷹 三松 梅鳥 山笑 有幸 定岡 春駒 香貞 三松 梅下 三松 金牛 一手 一河 青露 雨夕

飯どきに目移りのする茄子の色  
鼻へ穴明けて引出すうし丸太  
轉んでも只起ぬやつあしだはき  
丑の時参りはのろい女也  
仙人も古郷は忘しがたく落ち  
糸爪の水でも取らうかと居候  
もませれば下女尻つべたを尿づかみ  
御寝間では太い音も出す三の糸

亦樂評

有難さ野に遺賢無き君子園  
琴にせず高枕とは御妙策  
隅田の水巻上そうな御山號  
君樂の一味は松の根に生じ  
有難さ白銀孝は徳の元  
品川の霧一本はれ二本晴  
柘榴から凡慮の知らぬ火を生じ  
關が原序に凡夫責たがり  
まだ母の力嬉しき礎の音  
唐崎へ夜來風雨のしらべ琴  
邪は繼にもならぬ孔子篇

水治 三京 和田 山笑 山猿 梅鳥 里梅 同 鷺舟 器水 里梅 雨夕 柳糸 金牛 友松 志孝 可笑 東猴

孟此子爰においてと母安堵  
母親は慈悲と持病の咳をせき  
善悪の備は二流と唐で賣り  
神徳は返し武徳は呼び給ひ  
爪折に吾妻の雨を御凌ぎ  
まさ錢になると神樂も亂拍子  
酒臭ひ涎車を見て流し  
盃が濟むと柳の雪を取り  
やれ散るなくと師匠花の山  
乳は辛しとあきらめる閨年  
土手ともに十三丁の名所也  
咳拂娘に付る鳴子也  
此鉢巻の御不審が安鯉  
一ト夜さに十萬年が生る也  
鯛の片身が八百の元手也  
景清はなくし伍子胥は眼を残り  
笈すりを娘はるがほで縫て居る  
豆腐やと下駄や一度に藏を立て  
伯夷叔齊日坂へ来る所  
醒の一つ雪見に下戸交り

松里 留人 雨且 春駒 金牛 其笠 物成 其雪 雨旦 クツツ 藤波 里松 春駒 三橋 三松 木賀 和文 友松 木賀 山水



子の鼻を義理で乳貰撮む也  
 天に口有て生酔くだを巻き  
 ゆきたけは親の鼻毛とゝもに延び  
 二四不同佛も横と豎に成り  
 上帯に眞田をしめた夏御陣  
 藏宿は玉もの前にくどかれる  
 開帳のはれに和尚のちゝぶ絹  
 枳と桃で相馬の紫宸殿  
 晝行くを女房夢にだも知らず  
 産所へも見へる内裡の御造營  
 野雪隠人にかたるな女郎花  
 蜀の魂日本を飛あるき  
 十七の文字へ達磨の物語り  
 いよ紀伊國屋と三千人で譽め  
 末世迄雪折のせぬ孝の竹  
 岡釣に四馬の車はあたりもの  
 満汐に徳利干上る汐干船  
 孝行な嫁は守りに三百夕  
 孝行さ敵が死で出家する  
 申子も夢ばかりでは出来ぬ也

雪水 常住 半洗 雨旦 ヤマキ 山水 其笠 雨夕 和文 香貞 山猿 其雪 和文 猿子 マイタ 春駒 龜樂 其笠 山猿 柳糸

水瓶へ打た礫は世に響き  
 半壁は向ふ神田で時鳥  
 作る後家佛を尻に敷て居る  
 太刀は鞘目貫も鏝もしとね也  
 他の梅を臥龍と賣るも謀事  
 敵を粉にする砂ごしの知恵袋  
 たいこ醫者お爛の脈を見る計り  
 こんな腰有りと出口へ植て置き  
 義貞は荒布の道を踏分る  
 韓信はくゞり助六くゞらせる  
 いせの留守女房あこぎに綱を引  
 夜講釋初日は耳ツぱりばかり  
 十物を唐の婿だと下女思ひ  
 文してと書きは書いたが下女こまり  
 いびつなものでいびつなを好にさせ  
 花の供下女直作の髪でなし  
 はり替へた太鼓を和田は夜る扣き  
 錦鳥評  
 神徳は歸し武徳は呼び給ひ  
 六十は名月百は時雨也

古鳥 東猿 山猿 柳水 半旦 雨旦 器水 古鳥 志夕 金升 杜蝶 雨朝 葉千 比助 金牛 散壳 春駒 三松

松の魚第一番に松へ上げ  
 國の名の頭に松を御拜領  
 和かの浦左右は朝と夜るの牀  
 わかの道明るくてらす湖月集  
 孝行の外は道無き雪の中  
 濱萩を詠みそな伊勢蘆を詠み  
 行けば蜘蛛くれば神風吹きなびけ  
 江戸は卵の花都では梅で啼き  
 八つ鷹が寄つて雀の御評定  
 御きん玉掴んで知るは古狸  
 小判で三度文銭で一度しめ  
 青龍と蛇棒でしるは桃の枝  
 道法も末社ほど有る伊勢參  
 花の山坊主持する兩大師  
 ちいさくて口へは入らぬ初茄子  
 名高いは和漢で皿と瓶を割り  
 小便に花が咲いたで名句也  
 穴無しも目なしも交る小ぐら山  
 散ぎは、小町櫻もあはれ也  
 茶が好きになるとあたまが薬籠也

飽里 半下 マイタ 驚舟 マイタ 梅鳥 古鳥 是樂 和文 友松 杜蝶 和文 晴風 有幸 半下 新右 梅鳥 若蝶 其雪 山猿

弔ひを見て直の出来る初鯉  
 御居間の下へ黒がねのしんを入れ  
 骨折も三日坊主は本能寺  
 いきな傘朝せんで鬼と言ひ  
 もうおれも玉に疵だと權五郎  
 ひつつめるように嫁なを姑つみ  
 ゑばし魚何より高い三番そう  
 田の草の歌をしのぶとはぎで取り  
 朝顔は朝寐の人にしかみつら  
 ひなを仕廻ふと人間の直を付る  
 黒い絹で行燈をはる貧學者  
 初孫の力姑の角を折り  
 辨當は武將箸には茶人也  
 山開き辰巳はきせんぐんじゆ也  
 納つた御代は錢迄四海浪  
 鎌倉をもどれば桃や栗もなり  
 ほふられたとこで達磨は座禪をし  
 下手將妻あたま餘ッ程早くはげ  
 ぬひものに母のしつけが見へる也  
 夜具の出来たが暖かな御客人

春駒 古白 山水 山人 志丸 雨旦 三京 クツワ マイタ 是樂 時住 三橋 釣好 山笑 志丸 葉千 杜蝶 雨旦 煙幸 酒好

組うちの圖も入れて有具足概  
細ッそりと柳も見ゆる松が岡  
かねの出る穴が有ので寐てくらし  
禰坊主らせつしてから無一物  
火のよわい炬燵にゆだんすべからず  
月夜鳥でざんすから寐なんしな  
傾城も手取で花をよく貰い  
飯ばかり和らかなのに嫁こまり  
間屋場の手代人のみ馬も呑み  
ねん猫で寐せ犬の子でたゝき付け  
一聲も三聲も呼ばぬ玉子賣  
葺替て猪狼もこわく成り  
未だか未だか未だわかりかね  
待てどもこねば若いものゝ  
女房は角を出し蛇は舌を出し  
重荷をかつぎかることは是いかに  
葉たばこに吹ぶりのする寒い事  
生盛の玉をねろうは娘の子  
寒念佛冷て佛に成がゝり  
幽霊のとまり木花屋門に植ゑ

古白 釣好 石水 藤波 其流 松里 半下 口口 木偶坊 雨旦 雪水 近勘 里松 若蝶 雪下 和文 クツツ 志夕 杜蝶 酒明

するい嫁芋をやかせて喰て居る  
ヤマキ評  
金に色かへぬで松の位也  
はんじやうさすみに都や花の廓  
つうれいの女郎にふれぬ大鳥毛  
小むらさき江戸の氣性を立とをし  
けいせいのかんなるはかのもみぢ也  
第三に遣つたで花のてには留め  
日向より月にしをれる女郎花  
來べき宵櫻へ毛虫ぶらさがり  
あげまきを鉢巻で買ふ江戸の張  
打こけた客へ古郷のものがたり  
一間づゝ禿がふれる夜の雪  
はご板は客をはづます道具也  
けいせいをおもき枕の嫁に取り  
たままつりたんすへ女郎手を合せ  
傾城のまことはもみぢかきつばた  
しんじつはてうしの濱へつけとゞけ  
花よりも心のちるは仲の町  
つれづれなる儘に盡みせ文をかき

板人 賤丸 雨夕 可笑 山笑 杜蝶 松里 三松 雨旦 梅鳥 三京 三子 手枕 玉章 和文 磯川 志丸 玉章

素二米もち引ぞわづらふまじりみせ  
かごの口鳥の空音ははからせず  
ほとゝぎす初會はまぢりゝ聞き  
はいかんを道々ぐたく朝がへり  
六千の枕半分あてがなし  
たそや此夜中あかるき五丁町  
とうろ過ぎ長居は月へおそれ也  
丑の日にのろりとかへるいゝ男  
髪切りはいづれ狐のしわざ也  
もてたのち御身いかなるゆゑにより  
さあ見せへお直り候へ鈴の音  
しんぞうへ落葉かく成る迄かよい  
春眠曉をおほへず新造  
雪月花いづれ承知でもてる也  
吉原は竹の中から月がでる  
文月の下旬に雪の返す書き  
どうせうの相談をきく矢大臣  
中直りすりや明けの鐘おしい事  
禿がいはいくそれだつてかしんせん  
ちとあちらへと面白く店をたて

萬仁 磯川 雨夕 雪下 常住 山笑 シクト 梅京 里梅 新右 雨夕 青露 其流 芋ウ 有幸 松里 梅夫 手枕 柳雨

からだんすありんすやうにびんとしめ  
たてひぎでよむがそだよと袖をひき  
鳳凰の巢だちは長い返事也  
夕べにきいて大門へあした待ち  
おもしろさ文へかもじを入れて来る  
他に事をよせてふられたいざをいゝ  
初會ざりかよふの神に見かざられ  
さいつ頃來た客じやはと淺黄うら  
大ぶしゆびむすこ櫻を八重に見る  
唐の親大こん代に子をしづめ  
よしなんといつて氣のつくへんな嫁  
なきにしもあらず二人は丸はだか  
たいこ持ありんす國のつうじ也  
いそぐはづ番頭内も四つ手也  
こむそうの顔を鏡ですくひ取り  
深川へ身のせんたくにのつ付る  
腹だちをふみつけて行くうはぞうり  
むりどめにわかれの羽織肩がひけ  
わたしのほんのとゝさんは芋をうり  
うれぬばん見世に四五さう舟が付き

三京 花町 藤波 シクト 同 喜丸 磯川 是樂 升子 雨柳 鷺舟 和文 萬住 時住 有幸 金牛 是樂 シクト

手が有るで足を袋へいれるなり  
 もめができ一座ばら／＼扇也  
 くらがへは一の谷から下の關  
 甲冑は見なすけんだと下の關  
 遣り手ばい女郎のはてとおもはれず  
 市の客禿へ弓削のものがたり  
 かやうりの聲につられる四六見世  
 道くさをくふをつき馬ゆだんせず  
 いき杖がしやり／＼といふとモシ旦那  
 古市で大和廻りにきづがつき  
 一疋のねこ百疋にうれるなり  
 とくびこんとく丸山の三會目  
 こはいかに不慮な災難しりをだき  
 鳥の目を鷹にとられる二合半  
 ゐつつけを不仕を見てひよぐり  
 てつぼう見世のきさんじはすると出る  
 やすものゝはなうしなひは吉田町  
 大津繪のいきてはたらかるい澤  
 にくらしいネとたぐりだすしめたばん  
 川柳評

錦重  
 半下  
 木賀  
 萬仁  
 同  
 雨夕  
 雨旦  
 梅鳥  
 磯川  
 カテウ  
 其雪  
 シクト  
 松里  
 ベ子  
 杜蝶  
 雨夕  
 金牛  
 木賀  
 綾丸

しのぶすりしのぶにあまる御いかり  
 花の里これもあづまの名所也  
 い、田地櫻に鉄の入るばかり  
 舟車同じながれのうきしづみ  
 よし町へ度々一院の御つかひ  
 けいせいの鏡を舟ではぎやくする  
 きの國や姜維がきもの男也  
 座敷持小道具やほどかざりつけ  
 きついやつ最中の月を二拜くひ  
 袖留は孫のかたづくほどかやり  
 かんろ梅女げい者の加役也  
 三立目に松をせり出す大じかけ  
 親のためおちこち人に身をまかせ  
 どうぞ節會を仕廻つてと下の關  
 はな聲で俄たうろう見物し  
 朝がへりもう是切とおもへども  
 改易をせられて川岸の住居也  
 草も木もねるに書いてる長いふみ  
 遣り手の子さててへ／＼が上手也  
 かんづいてるに袴で出るやつさ

賤丸  
 ヤマキ  
 可笑  
 杜蝶  
 和文  
 シクト  
 和文  
 志夕  
 和文  
 有幸  
 玉章  
 柳水  
 ヤマキ  
 和文  
 ヤマキ  
 同  
 杜蝶  
 金牛  
 ヤマキ  
 物成

目がさめりや茶や舟宿のつらにくし  
 うらおもてまであきぎなげられる  
 年こしに氏子をあくるつかはしめ  
 めやうな晩禿やつへし耳に口  
 花やかなあるじをむす宿とする  
 かくてははてじとせげんかこへ乗せ  
 下女でなし禿でも無し小ぢよく也  
 一度かひおれが女房もすさまじい  
 仲の町せなあすこぶる仰天し  
 かんどうに神はあがらせ給ひけり  
 三度めにいとらうたけたばいあ出る  
 見きつたかほれたか女郎いけん也  
 ぼろ／＼とした客どれもひとよぎり  
 おそるべしゑくばへ人をはめたがり  
 無一物たんとすにざせん豆ばかり  
 芋が子はゑご／＼とした禿也  
 くどきしらけてけいせいはいんぎんさ  
 せいろうへふけた息子をもちにつき  
 見申したやうでざんすと首尾のよさ  
 遣り手ばい女でないといふ角力

□ □  
 松里  
 玉章  
 金升  
 梅鳥  
 雨夕  
 磯川  
 ヤマキ  
 同  
 杜蝶  
 ヤマキ  
 シクト  
 里松  
 ヤマキ  
 山笑  
 ヤマキ  
 磯川  
 綾丸  
 山笑  
 ヤマキ

根津の文大工の所へ釘のおれ  
 どらおやち鴨居ひく／＼てく／＼りかね  
 風呂敷と三分にぎつて禿かけ  
 素一步は陳倉道を只一騎  
 過ぎたるもふられ及ばざるもふられ  
 うりぶりのわるさ癪だの頭痛だの  
 花が見たくば吉原がいつちよし  
 もてた部家ふられたやつが居候  
 やさしく申すもの哉ほれんした  
 月のふみ息子よしなにくみわける  
 さあ事だおやち土手迄出馬也  
 かんざしでぢれつたい穴ニツ三ツ  
 柳橋火細ちよつきり丁度也  
 ちかくして遣し格子の内と外  
 請出した時分はこゝらでのくらし  
 そのにくさ遣り手いたいきましやう也  
 遣ひはたして女郎やにさしだらけ  
 名を聞けば八兵衛といふ女郎なり  
 入かへのならぬ代呂物息子うけ  
 四百ごみ三步は禿でかしたり

三松  
 雨旦  
 ヤマキ  
 和文  
 金牛  
 シクト  
 芋洗  
 三木  
 ヤマキ  
 金牛  
 手枕  
 マイダ  
 其笠  
 ヤマキ  
 杜蝶  
 ヤマキ  
 三松  
 シクト  
 金升  
 磯川

朝がへりつくく思やかつばの尻  
かるい澤どろ田を棒にふるところ  
朝がへりあらおそろしの山の神  
たがひにゑいやと引く拍子百おとし  
黒助の湯立でれつくさらへくへ  
朝がへりさんなすむゆの論が出来  
据風呂で夕部の客のたなおろし

金升 猿子 可笑 綾丸 磯川 龜樂 玉章

難波常雄  
田口重男  
文傳正興  
校

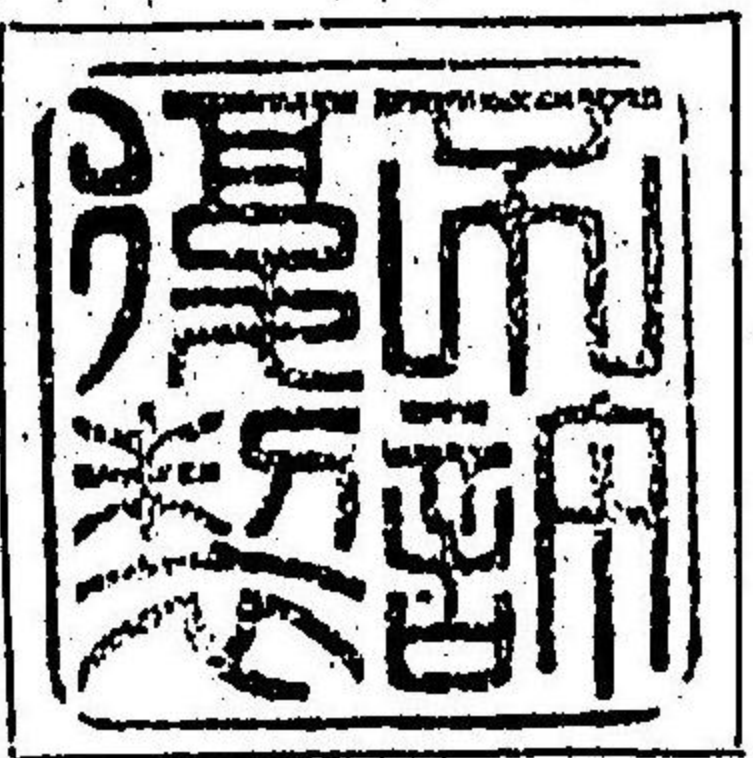
伊柳多留六十篇終

近世文藝叢書第九終

明治四十四年六月廿五日印刷  
明治四十四年六月三十日發行

(近世文藝叢書第九與附)

非賣品



編輯者兼  
發行者

印刷者

印刷所

發行所

東京市京橋區新築町五丁目三番地  
國書刊行會代表者

早川純三郎

東京市京橋區新築町四丁目三番地

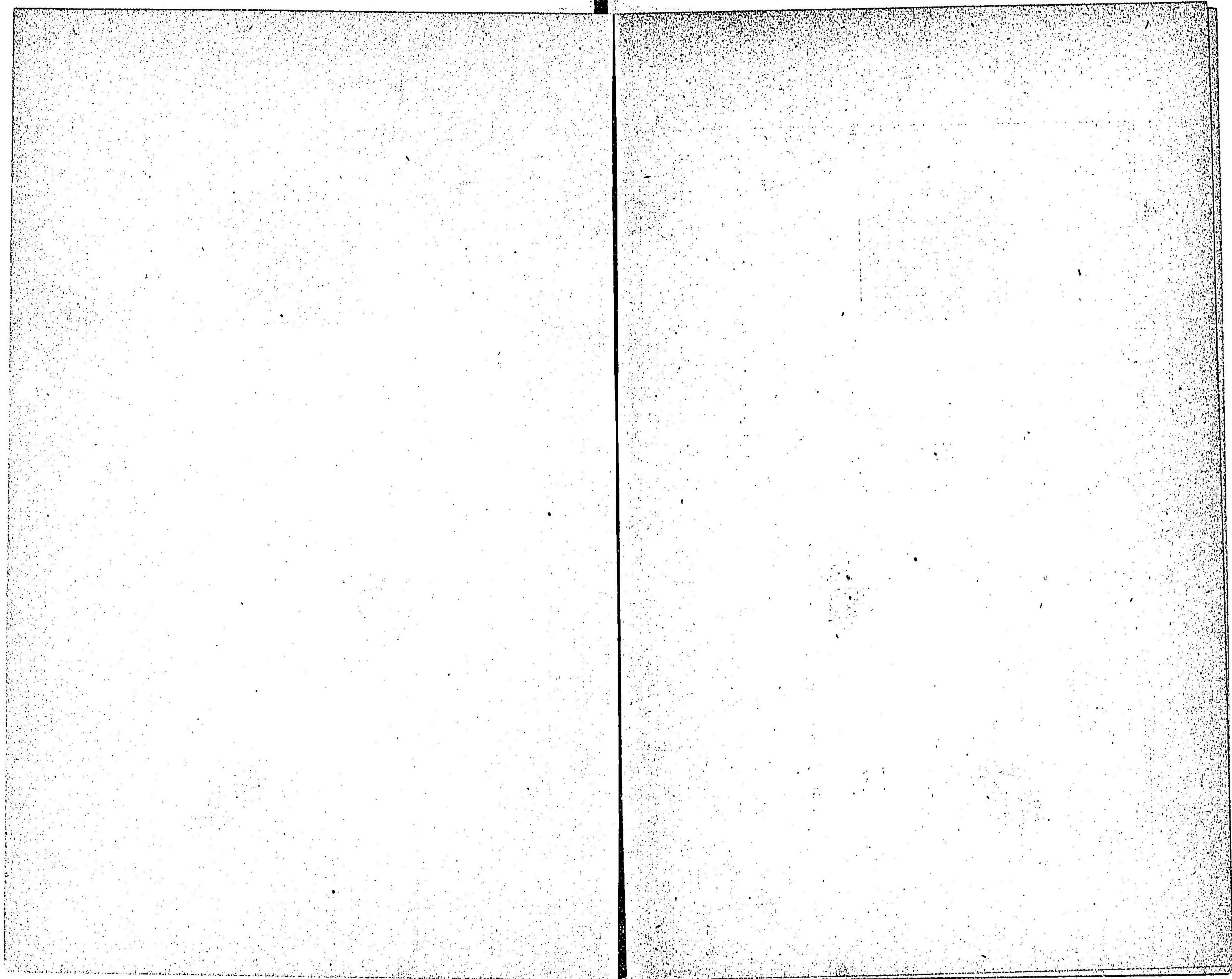
高橋赤次郎

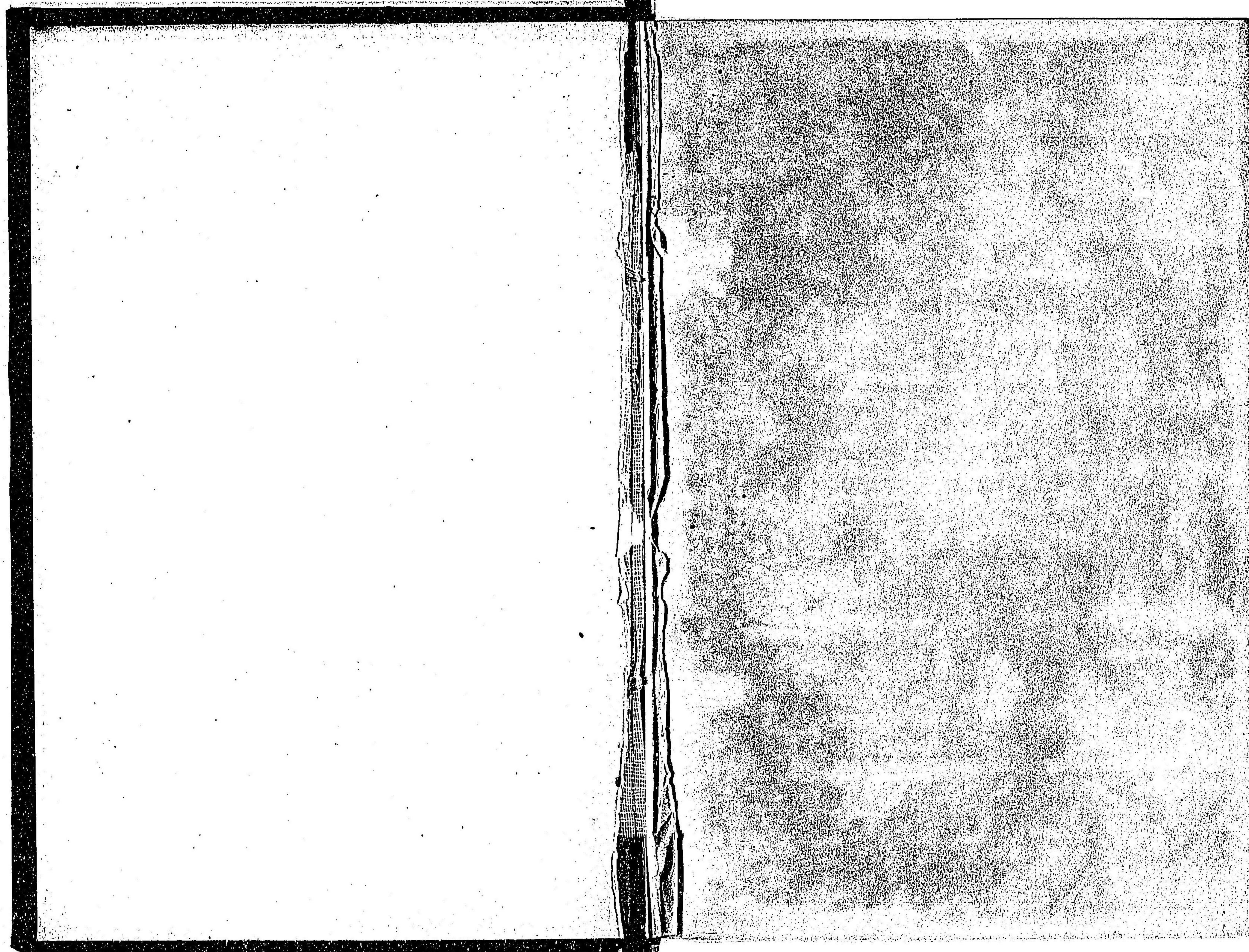
東京市京橋區新築町四丁目三番地

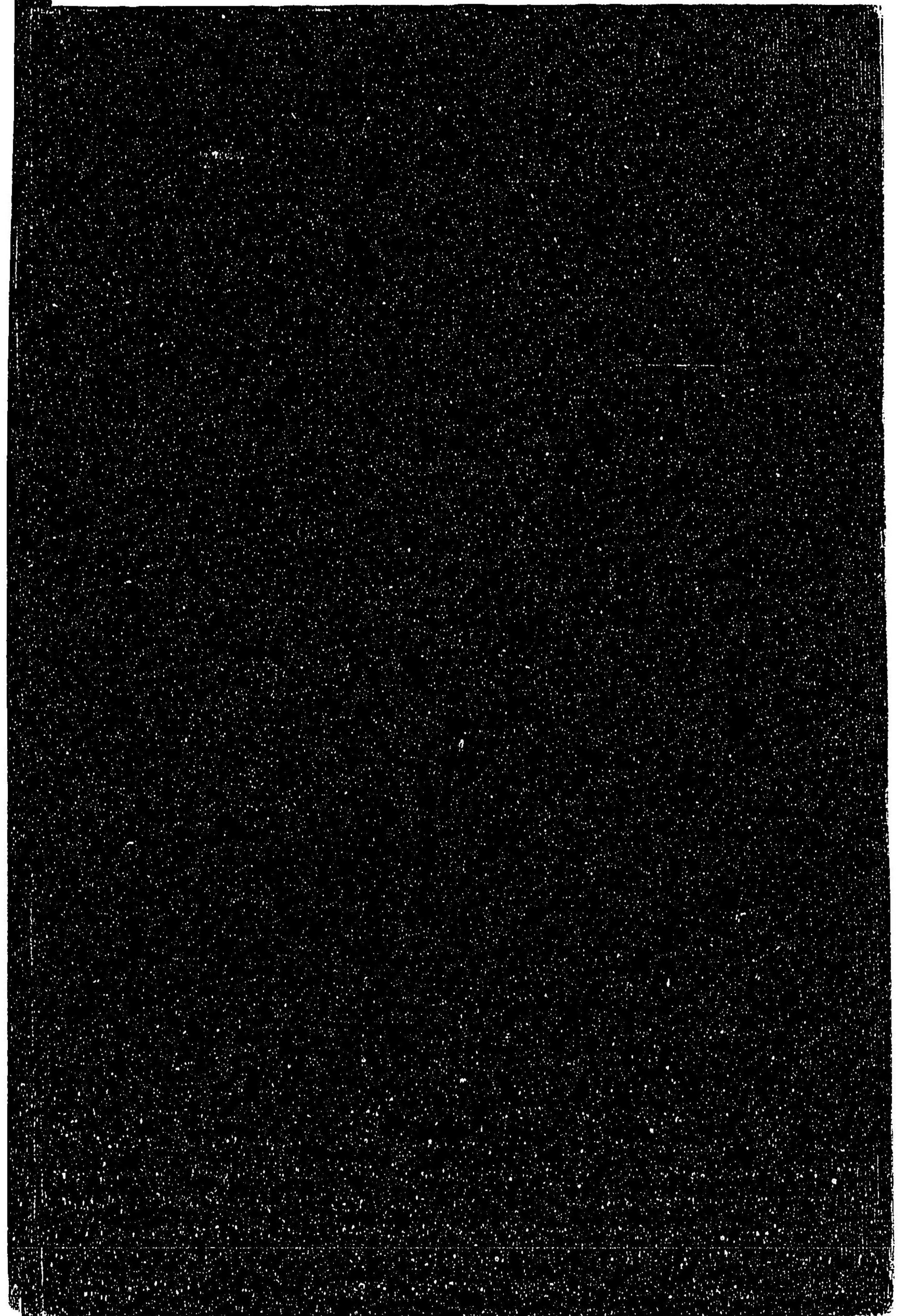
國書刊行會第一工場

東京市京橋區新築町五丁目三番地

國書刊行會







910.8  
Ki249  
K

084866-009-8

910.8-Ki249k

近世文芸叢書 | 第1-12

国書刊行会

M43-45

DBB-0028

